

おほかたの世中うきも樂しきもたゞわれからの心なりけり
一つきと思ふ日もなしうき事もさきといふ名のゆかしけれども
あゝかじな敷ならずとも君が代に葵の紋のみとも着る身を

此六百餘首の文政元年といふ年の春より天保二年といふ年の冬までの歌
にてこなたかなたお書きおかれたるそが中より相澤賢道と田澤千郷と共
に取いでたるを島岡長盈に清書あつらへてかくいなせり猶是より後のも
多かれバそも同じさまになすべく思ひ暮らし思ひあかしつゝなむ

天保八とせといふとし二月

八 木 直 賢

佐喜草 終

葎園倭歌集序

やまと歌の我國に生るゝ人いにしへより今に至るまで是を學びよまざる
の少なしきかあれど其歌の道まことによく知れる人いとままなりとなむ
こゝに我師葎園の翁いと若かりし時より心ざしあつく此道を好みあまた
の年月よまれける歌をこぼくなるをそが中よりつれづれを感さめむとて
かきつめられたる此一卷かりそめのまさびにせられたる物なれどおのれ
是を見まはしくまひてこひえてひめおきつるを同じく共にか心に心さす人々
にもませまはしくこたびそをとりいでて櫻木ののせたるになむ

元治元年霜月八日

一枝堂清忠 志るす

日頃雨そぼふりてつれくゝなるまゝに年頃よみける歌どもをかきつめ春夏あき冬こひくさくゝのついでをたてすべて百うたわはせてこれを一卷となし名づけて葎園倭歌集となむいふまかあれどこの世に永くといゆむとにわらず只ときまのつれくゝをなぐさめむとてなむ文久三とせといふ年のやよひ葎園のあるじ河邊のかずなり

葎園倭歌集

忍岡隠士 河邊一也

春 歌

春さちける日よめる

はのくゝと霞むを見れば久方の雲路よりこそ春の來にけれ
關路立春といふことをよめる

あふ阪の關の杉むらかまめるの吾妻路よりや春のさぬらむ
家に歌よみける時待子日といへることをよめる

いつしかと人にひかれむ子日をや小松ものべに立て待らむ
若 菜 わせよりとまめてし若菜夜の程お妬くも雪のつきてける哉

殘 雪 雪ふかさかた山かげに來てこれば春の至らぬ里もありけり
谷津政秀が家にて海邊霞といふ心をよめる

あしや海なみに夕日のさしながら霞みてくるゝ紀路の遠山
梅此花を折りてと人此いひければ折るとてよめる

袖かけてみれど及ばで梅此花思ふたち枝のをられざりけり
春 雨 つれづれとふる春雨や一年の物のあはれのはじめあるらむ
海邊春雨 あはち島霞むと見る雨なれやぬれてぞかへる須磨の浦舟
歸 雁 ねになきて歸るをさきバゆく雁もさすが別や悲しかるらむ
村田清忠が家ひて雁別花といへる心をよめる

歸りゆく雁にひとせ習はやはなにかるゝ心づよさを
春 雲 よしの山花あまがひてつ時の雲さへかをる心地こそすれ
終日尋花 櫻狩むなく日こそくれにけれやどりの花と思ひしものを
花 せがのねの長き春日にさく花のいかで盛のみじかゝるらむ
花似雲といふことを建部内匠頭政醇君此よませ給ひけるに

けふ見ればみな白雲となりはてゝ花こそなけれ小初瀬の山
友とする人ひとり二人いざなひて飛鳥山おはき見にゆきけると暮山花といへることを
かのくよまむとてよめる

飛鳥山ふもとの道のたねくゝにくるゝもまらず花をみる哉
野外花といふ心を森川兵部少輔俊陸君のよませ給ひけるに

わくがるゝ心のはてもなかりけり櫻さく野のはるの夕ぐれ
松 間 花 かきおもり身を恐ぶべき山なれや花さへ松に隠れてぞさく
北村躬鶴が家に人々ゆきて江山春興多といへる心をよめる

大井川いり江も花になりけり櫻ふきかゝるす山のあらしに
水邊山吹 こがくれてさく谷川の山吹のちりそめてこそ人にまらるれ
暮春山吹 山吹のさけるを見れば吉野川さしこそ春のどまりなりけれ
山本政貴が家に人々集ひて暮春月といふことをよめる

梅がえに匂ひし月のうつりきて藤の花あもかゝりぬるかな
暮 春 あかずしてちりにし花を戀るまに殘る春あも別れぬるかな

夏歌

殘 花 夏山にのこりてさけどおそ櫻いろ香の春におくれざりけり
山 夏 月 なつ山の花にをらまし一もとの櫻のみこそつきのもりけれ
海野遊翁がとひ来てこれかれ物語しける程に時鳥の始めてなきけるをきいて
君にけふとはるゝだにも嬉しきお時鳥さへおとづるゝかな

とよみけれハ遊翁筆をとりて

時鳥ひとかたならせ覺ゆるハ共にあはれときけハなるらむ
深夜郭公 ほとゞぎす人を静めて後ふこそ恐ぶ初音のもらしそゆけれ
菅沼養州雄が家あて百首歌よみけるとさ船中時鳥といへる心を

みなと川けさこぎくれハ時鳥いく田の森のかたになくなり

山梅雨 さみだれの峯のかけ橋人たえて雲ばかりこそ立世たりけれ

村田櫻子が家あて名所五月雨といふことをよめる

住吉のさしの松がね波よせてむかしにかへる五月雨のころ

北村躬鶴が家にて雨中水雞といへることをよめる

窓をうつ雨の音だにねられぬに水雞も門をたゞく夜はかな

鶴河 おのが身の簪ともえむ後の世のむくいもえらでさを鶴舟哉

河野伊豫守通御君此家あて簪をよめる

谷川のくらしいはまにすむ螢おのれもえてや夜をえららむ

水邊 螢 かかうつを螢しなくハ艸村に清水のあるをいかでえらまし

泉邊納涼 我宿の庭にまみづをせき入れて隣にえらぬあさを來ふける

秋歌

秋たつ日よめる

はのくゞと明る田面の稻葉よりあらはれをむる秋のはつ風

立秋 風 時わかぬものと思ひし松ふこそまづ秋風のおどいさこゆれ

艸花 人もなきまぐずが原に女郎花誰をうらみてたてるなるらむ

あひまれりける人の染井の山里にゆきて野薄といへることをよめる

くれかゝる末の原野にむれたちて入日をまねくまのゝを薄

露 我秋のゆふべの袖にくらぶれハ艸木の露にぬれぬなりけり

夜 虫 花のみな色なく暮れて秋の野に虫のこゑこそさかり也けれ

野秋 風 山邊より一木が末をたづねきて野なかの松にあき風ぞよく

秋 夕 いつもさく入相の鐘と思へども常にハかはる秋のゆふぐれ

おもふことありける頃秋夕の心をよめる

我のみやひとかく物の悲しきとはいや人に秋のゆふべを

海邊秋夕 まはくまぬ我袖をさへえたる哉あしやのなだの秋の夕ぐれ

駒 迎 逢坂の木の下關をひくほどのみな黒こまど見えわたるかな
月 田のもよりあらはれそめて伏見山まつの木間をいづる月影
葎の園此あばら屋に人々とひ来て荒屋月といふことをよめる

あれおける宿の今こそ嬉しけれ今宵いたまふもる月を見て
石原正明がすゝめて風前鹿といへる事をよめる

露まげきまその、艸をふきわけて鹿のねこがす茶の秋かせ
秋 夜 秋の夜の尾上此を鹿野への虫なきて明さぬものなかりけり
秋の歌としてよめる

雁がねの聞えし夜よりいねがてに寒くも秋のなりにける哉
あひまれる人の目白此山莊にて松下袴衣といふことをよめる

衣うつ音こそこのこれまつ風いふけまづまりし山此ふもとに
海邊 袴衣 うら波の音と一つになりけりを心まは海士の衣うつこゑ
河野伊豫守通備の君此家に人々つどひて山紅葉といへることをよめる

時雨ふる秋此山へをきて見れば松ばかりこそそめ残しけり
長月のつむり方に虫の聲さこえをなりにけるをよめる

暮 秋 さりく、を弱りてなきもやらぬこそ聲さくよりも哀也けき
うれふる事ありける年の長月のつむりの日よめる
中々にをしむ月日にくれゆきてとまるいあきの心なりけり

冬 歌

本間勝善が家お人々つどひて落葉をよめる

聲たて、落るをさけけりもみち葉も枝の別やかなしかるらむ
瀧 落 葉 あらし山梢の冬になりぬればとなせの瀧をもみぢしにける
なげく事ありける頃木葉のかつるを見て
のこりなく木葉ふきまく木枯も我なげきをば拂はざりけり

海野遊翁が家に人々つどひて千鳥をよめる

なぶのどのあきしの風の吹こしにと渡りかねて千鳥なく也
水 鳥 朝まざさむれてたちゆく水鳥あおとまでさわぐ庭のいけ水
忍が岡のかくま家に久しくとはざりける人のきたりけるときに別惜しみて夜ふくるまであ

りて冬月をよめる

冬ぐれの庭あそくまのなかりけれ月を秋どの誰かいひけむ
山本政貴が家ふて山家氷といふことをよめる

山里の軒端のかけひこほりして水も音せせなりにけるかな
雪のふりける日三位宰相の君の御前にめして歌よめと仰せられければよめる

暮山雪 入相のかねよりほかの音もなしをばつせ山のゆきの夕ぐれ
ふりかゝる氣色の花とみゆれども雪ふの袖も薫らざりけり
菅沼養州雄が家ふて百首の歌よみける時雪中待人といへることを

まつ人のきぬべき道やえぬらむぬまり深くもつもる雪哉
同じうち爐火忘冬といへることを
埋火のあたりばかりみくるはるのまだ露もえらぬなりけり

村田筆子が家ふて歳暮の心をよめる
ひたぶるに暮れゆく年を惜みての春を疎むになりぬべき哉

戀歌

初戀 覺束なはじめて物をかもふ身にいつならひける涙なるらむ

忍戀 かくばかり包むとまゐるゝの心をえらぬ涙なりけり
百首の歌の題によせて戀の心をよみける時別のうゑに

はかなくも旅ゆく人を戀そめてあひ見ぬさきに別れぬる哉
不逢戀 かへつべき命を人此いたはりてあはぬの我を思ふなりけり
思ふ人あひたぐたくありける頃

露の身よ消さば消ねきえせとて同じ世にふるかひしきければ
ともしによせて戀の心をよめる

こぬ人をまつにつけてももゆる哉思ひの峯の照射あらねど
葎の園ふ人々どひきて題をさぐりて歌よみけるに月前待戀といふをとりて

こねばとて月のとがあもあらなくに更ゆく影を何恨むらむ
親のまもりける人の娘にいと忍びにあひて

命あもかへてあひ見し中なれば別のえぬるこゝちこそすれ
山本政貴が麓舎ふて後朝戀といふことをよめる

えぬばかりつらき別に今ぞあるあはぬもひとの情なりけり

依忍稀戀 何故にいとかく塵のつもるぞと枕のとはいいかいこたへむ
遇不逢戀 今ぞまるとむ世をかねて契りしは又あふまじき心なりけり
人をうらみてよめる

旅 戀 あまりおもつれなき君が心かなうきみ故との思ひえれども
限われはけふ武藏野もわけまてつ果なきもの戀路也けり

雑歌

曉 わかつきの關の空より聞ゆれどさやけくもある鐘の音かな
海邊眺望 清見海いまはとまらむ浪まよりあらはれをむる三保の松原
山 入間路や大屋が原をけふくれはのかに見ゆるを筑波の山
瀧 ふさら山神のをさめし此御代は何をうらみの瀧のかつらむ
さらし井 名ばかりの流れて音に聞ゆれどあせはてけりな晒井のみづ
橋 谷深みあやふき杉のまろはしハ命をかけてわたるなりけり
なぐらの橋 きゝわたる其名ばかりのくちぬ哉長良の橋の跡も見えねど
逢坂の關 もる人もたえてあとなき逢坂此關の名のみをとむる也けり

遠寺夕鐘 かさなれる雲の奥より響くなり遠やまでらの入あひのかね
閑 居 世に我を去りてとひくる人も奇し忍が岡のおくにすまへば

山家の歌よみける中に

都びとかへりしあとの山里にすみはじめたる心地こそすれ
覺えず夜をわかしてよめる
燈火のかけにむかひて窓のどのまらむもまらず文を見し哉

兵部卿探淵齋法眼藤原守真のかける紀朝臣貫之の像によみてかきける
敷島のみちを尋ねて今ぞまると紀にこそわかぬ浦ありけれ

若狭侍從忠進の君此御娘照子の君の歌の道の教をうけまはしどのたまひて
千代までの杖とも君を頼むかな言のは山におもひいる身の

と詠みてたまはりければ返しに

思ひさや道を深くもふみまらで言のは山のまるといひて
人の色紙に歌をかきとありければかきと送るとて筆あしくしていと拙くなどいひて
もとよりの手の拙さをまらせして筆のどがとも思ひける哉

人と暮らちける時

一つだにとられぬ濱の真砂哉うちかけらるゝ強き手巻きに
勝山一雄が十年のまり家にきつゝ歌の道まきびけるを國よりむかへのきて佐渡お歸りけ
れば又あふ事もあかるべしと思ひけるにはから老明る年とひ来て又歸りける時によめる
程もなく又とかるゝが惜き哉おはぬよりのと思ひなせども
ふどうと森良知がこしへゆきとるとさ詠める

歸る山ありとさくこそ嬉しげまさても別れむ事ハうけれど
旅 ゆきくれてをりしく野邊の艸枕早くも露のむせびつるかな
野 旅 ゆきくるゝ空を其日のかざりおてわくるや幾日武藏のゝ原
旅 宿 ふるさを夢に見し夜の曉のまゝ門出するこゝちこそをれ
湯島開月庵ふ人々ゆきて霧中間霧といへることをよめる

鶯もやどりたづぬる聲すなり里とひかねてたどるはる野に
旅 宿 月 都おてわかれし月のたづねきて同じ野へおも宿りぬるかな
ゐなうへゆきける時野中にふせりてよめる
世中のいつくも旅とさゝしかどみやこにくさの枕やいせし
あひまれりける人の彌生の末つ方うせければよめる

花をなどはかなくちると恨みけむ人も盛のまばしばかりを
父君のうせ給ひて此又の年此春花を見てよめる
みるたびに植し君のみ恐ばれて花ぞなげきの種となりぬる

五月五日父君此おもひおてこもりおて
人なみふ今年ハ池のあやめをもひかねにつけてぬるゝ袖哉
めのうせける年の秋よめる
こほろぎのあきこそ明せ秋の夜の長き別をくゆるなげさに

山本政貴が母の冬の始つ方うせければよみて遣しける
山本のはゝその紅葉ちりしより袖に時雨のはるゝ日ハなし
香川肥後守景樹宗匠のうせける年の冬寄雪懐舊といふことを陸奥介景恒がまゝめて人々
によませけるよよめる

あはれ君などはかなくてやみぬらむ消にし雪ハ又もふる世に
本間勝善がどはつ祖此蹴鞠をいさう好みけるにうせての後多くの年をへてかの家に人々
つとひて寄蹴鞠懐舊といへることをよめる
くち残る君がまらばの松を見てかゝるゝそでの涙なりけり

二葉政孝がひまこの元服しける時かの家にゆきてよめる

未かけて初元結にむすぶかな二葉のまつ千代のちざりを
母君の七十の賀しける時よめる

行末の千年のさかに比ぶればまご七十路のふもととなりけり
祝　　むさし野の花の都となりゆきてはてなく見ゆる君がみよ哉
三島の宮此いにしへの書校へ正まことありけるある水無月の始つ方より日いたくてりて
ここの外に暑かりければ二十日頃田の水なくなりて稻もかれぬべきさななりけるに日お
そへ暑さつのもて廿六日といかふもたへがたかりたれば

枯ぬべき稻をみ島の神ならば雨ふらせてようるふばかりに
とよみけるにいつしか雲いで来やいかづちなり暮方にいたりて雨はげしうふりけりま
ばらくありてやみにけれども又二十七日の夜大雨ふり又二十八日ひねもすよまがら雨
ふりければ暑さも薄らぎ田もこどくくうるはひふけりそもく此雨拙き一也が歌ふよ
りてふりけるおのあらでおのづからふるべき時にあさりたるにてもあるべけれどおひに
あひて折しも雨のふりたりける誠にありがたき事になむ

苔清 水序

石上ふりにし世の手振を仰ぎて磯城島の和歌を好み其さま心をもさどり
得むとさうしく思ひおこしてよむらんさぐひにのあらずして昔我いまだ
稚うりし時に百人一首の歌をよみおぼえてお此言葉のおどしく和らかに
うまき調の耳につきて忘れを口にまねび習ひて遂に和歌をよまはしき
心どの成ふたり然れあれども我下總の國お此時此事に聞えたる人ふつに
あらざりければつくべき師なく學ぶべきたよりあきてあぢきなく月日を
送るまに年十五おぞ成にけるそもく我家農民にして父なりける人弱く
するなりはひのたへがたげなるを見るにま此びを我身のたけのび力つく
をいつしかと待ちて十四になりけるとしの秋より農業をあらひつとめて
入相の響を田野にさかざる日なしかく暇なき身ながらまばらくも忘れざ
るの歌なり時に飯島某といひける算術のせむまやうあり詞のはたらきを
まさまへて人にませせり此大人にあひて先おの大概を問ひきゝて後の山
田のひたのひたふるに書おのみよりて村肝の心をぞつくしける書のかの

なりはひまげ糸のまげかりければぬばまのよるくさむ學びけるそれ
 はた晝の勞れおたへで二ひら三ひらの書ひらき見るまに文机にかしら突
 きあてゝ眠るを父母のいどほしみ給ひて諫むること折々ありて猶やまご
 りければさる時冬はうしろに衾をおはせ夏の蚊火をおきてたすけ給へり
 し其恩の深きいつの世おかの忘れぬべきかくしつゝ年ふるまに世此譏い
 で來てみにくき事ども二所の耳にきこえて此時ぞいたく戒しめられさり
 ける其意にもどらむのかしこき業なれども深く思ひまぬる心より答へ
 けらく今かたはしをだに學び得ずして此まゝにやみなばいよゝゝ世の人
 にそしり勝れぬべし才なしといへどもいときなかりしよりおもひ入りぬ
 る道おしわればいかでう成しえざらむえましかば遂おの誹まけておのづ
 から此まゝうおとやみおましこれが爲になりはひをだに怠らずバ今少し
 の間耳に入れ給はでぬむじ給ひてよとせちに聞えしかばおはれどやお不
 しけむ諸共に涙かさ拂ひてこの後ふたゝび諫め給はざりさるに若心ゆ
 るび學怠りなばおのれのみならぬ名を腐しつべしとこれより殊に窓の燈
 をかゝげて夜の更くるをまらず或の雪霜をはらひ涼しき木蔭をもとめず

辛くして此道の百が一をぞきまゝりおけるさかいへ世の人の一年の學お
 のま十年にまつればいとかるかおて詠出ぬる歌僻おやからむを板にゑり
 て世にひろめむむをこなるわざなればつゝましく思ひけるを門人これか
 れいひけらく年頃からうじてよみかさぬるを草の露むなしくちらしはて
 なむひ口をしき事なればまひても此度の思ひたちねとぞまゝめられける
 誠の我願のみちぬべき時の至れるおて家集なりなバ亡父の靈おも手向け
 て奮き罪をも申しひらかばやと思ふ心よりうべなひて藻汐艸うき集めお
 きつる歌ども藤原正賢伊能頼則三橋鶴彦等にわつらへ撰ばしめてすり巻
 どなしてこれが號を善清水となむ名づくる事おのなりけるかくて此は
 し書すべき人なきにしもあらねど誰もみな人の上をバ譽めたゝふる習に
 しあれば家のまづしきをもつゝみ學の至らざるをもかさり拙なき歌をも
 もてかゝやかして世にいつはらむおとを恐るればなりけり時に安政元年
 きさらぎ七日の日無境庵にありてまゝるしつ

神山魚貫

苔清水抄

神山魚貫

立 春 いでて見よけさの外山の白雪も春きにけりと霞みそめたり
 山 立 春 雲井よりたつ春なれば大きみのみ笠の山ぞまづかすむらむ
 澤 若 菜 夕日さす野澤の末の山かげお若菜つむ子やひとりなるらむ
 餘 寒 天地のあやしきものうかげるふれもゆと思へば又雪ぞふる
 梅 薰 袖 おはれとてたちよる袖に梅の花心ありてやにはひえむらむ
 我無境庵ちかき處に梅ありて年々咲さちるまをわの物が物としも見つくしてよめる

一人のみ梅をかざして山かげに遊ぶたのしき誰かまらまし
 梅 花 盛 片岡のあしたの原の梅みにといでたる道もさかりありけり
 落 梅 うちなびく柳を見てや梅のはな随ふものどかぜにちるらむ
 柳 風 青柳よなどさの靡くわづらはし心づよくのかぜもかよはじ
 柳 隨 風 うら／＼のどけき春の朝ごちにまづうちあびく園の青柳
 庭 柳 人のすれば我もしてけるさし柳やがて垣はとなりける哉

雉 雀 玄なが鳥るなのふし原はる深み下草あさるさすなくなり
 雲 雀 何事を思ひこびてか春の野のはてなき空にひぼりゆくらむ
 夕 花 春の日のたそがれ寒く見ゆるまでさかさなれる山櫻かな
 月 前 花 久方の天の岩戸もおはふらむ花よりいつるありわけのつき
 花の頃嵐のいたくふくに

家にありて嵐此音をさくよりいちる木の下にゆきて惜まむ
 人の家の櫻を日此くる、まで見て友達と別る、時に花のちるをよめる
 ちり／＼に人の見ゆれば山さくら花も今いど移りそむらむ
 彌生望の日花を折りもて道もなきところにまどひて

山櫻をりもてくるまもと原まともをまげみ花ぞうつろふ
 落 花 あすとだに頼まれぬまで山櫻ちるゆふぐれを何にとひけむ
 夕 落 花 夕づく日にはへる山此春風にそこはかとなく花ぞちりくる
 水上落花 みよし野の吉野の川の荒き瀬に打散る花のゆくへえらむも
 野 董 名もさかぬ野への小草に埋もれてあゝら董の花ささきあけり
 野への皆董ばかりに見ゆれどもつめばささらぬ物もぞ有ける

遅日 大空の霞をわたる天つ日いたどくしさにいそがざるらむ
 蝶 花の上に折々さちてまふ蝶の嬉しさあまるこゝろなるらむ
 雨中蝶 ぬれぬとも同じくいとて鈴菜さく陰や蝶の雨やどりせし
 名所山吹 山吹の花のさかりにあひおけり井手の玉川たまさかに来て
 水邊藤 やまかげの涼しき水にかけ見えて木末になびく藤なみの花
 首夏 花鳥のとまらざりける別よりうづきと人のいひやそめけむ
 残花 雪きゆることおそかりし山陰のさくらも夏に残りてぞさく
 尋時鳥 山もとに人れたるも時鳥こゑきしおのわらぬあるべし
 行路時鳥 いでくれバ道になくなる杜宇など家になてわれの待ちけむ
 野郭公 小松のみある野と思へば時鳥こゑの高きもまじるなりけり
 黒戸の濱に遊びて時鳥此なくをさく

早苗 鶯がなく峯の椎柴はなさきぬふもとのさ苗いまやとるらむ
 五月雨晴 さまだれの雲まに見えて磯崎の松おもしろき夕日かげりな
 澤水雞 ぬなは生ふる淺澤水にすむ月をふみ濁しつゝなく水雞かな

鵜河 みる人の悲しさならバ鵜飼舟あすの夜川もやみぬべらなり
 照射 さを去かの命なりけり夏山のともしにかゝる夜半のむら雨
 笠 夕されバ笠とぶなりかりたちてけふ麥かりし前のをはたに
 雨中笠 我やどの木陰をぐらき梅雨にくるゝもまゝで飛ぶほふる哉
 社頭笠 神垣のよるべのミづにかけ見えて木間さびしくとぶ笠あな
 名所笠 宇治川や鵜船のかいりもえ盡きて笠ばかり此夜と成にけり
 泉 やまかげに出る古井のうもれ水かき拂はるゝ夏なきにけり
 樹陰泉 清水のみ涼しと思へバ影うつす松おもあきの聲のありなき
 山家泉 わが門のねぶの木陰のこけ清水いつ結ばれて濁されおけむ
 樹陰納涼 清水わく宿のゑるべのなりひさおかけおくも又心ありけり
 八日の日ふよめる 松たてる境にくれバいつきても涼しき風のふかぬ日ぞなき

幽居 世にうしといふなる秋を棚機ひ七日すぎてや思ひゑるらむ
 行路萩 世中の秋みれむら萩に隠るばかりのいなりなれども
 のる駒のふるふいな變うちふれてあたらま萩の花散しけり

名所萩 鶯のはつねきゝてしくだら野の古枝のま萩はなさきふり
 薄帯露 ひねもきおまねきし袖をかたしきて露にふしゝる花薄かな
 朝顔 残りぬる心おげおも見ゆる哉ひらけはてゝる朝ぐほのはな
 風前萱 ふう風にまかせて見れば萱も思ふばかりの乱れざりけり
 庭草花 おのづから心の色も見えぬべしはかなき花を庭にうつして
 草花盛 野べの花今さかりわがせこが見に出なむといひし時きぬ
 野草花 秋の野に出て花をるこれのみ心になふわが世なりけり
 深夜虫 何事を虫のわぶらむ寐さめて此後だおながき秋の夜すがら
 深夜鹿 宵のまに聲せぬ野べのさを鹿のふけてと妻やとのめ置けむ
 浦秋夕 うらづふ人の心見えぬとも姿さびしきあき此ゆふぐれ
 霧隔人聲 佐保山の紅葉みにゆく人ならし朝ざりがくれ聲のきこゆる
 霧中雁 薄霧のいな葉にかゝる山もどをはるかにすぐる鴈の一つら
 故郷月 思ひいでてとふ古さとの草此はらむかしの池に残るつき影
 六年ばかりささの事ふりありけむ龍角寺といへる山里よりたけばかりなる楓の木をひき
 もてきて植おきたるが今のよき程になりて秋毎に唐くれなるの色をませり一年おとにめ

でたく見えつるが大方ちりていさゝか残るを見て

そめつくす色まち遠にかもひしや残れる枝の紅葉なるらむ

もの聞えかはす人山里にあり其家にゆきて庭の紅葉の遅くちるをよめる

世中のへやすく見ゆる山里の紅葉もちるをいそがざりけり

閑庭落葉 いとしく門ふり埋む木葉のなもとより世おの出しと思へど

寒月 木枯のふきつかれにし木間よりまづまりいづる月の寒けさ

細代 こがらしの寒くふく夜の網代守いくたび家を思ひいつらむ

野外雪 竹なれば境のまがさをれふして野邊よりつづく庭のまら雪

契待戀 こむといひし今宵の月も更おけり大空に此み人やちざりし

夢逢戀 あふと見し夢のなごりの床此露ひとの涙もそひやまつらむ

思戀 新田山松の葉見せぬえら雪のはるゝよもなき我おもひかな

通戀 あさち原ゆふ露でもりなく虫のまのぬれつゝ我こし物を

寄獸戀 ますらをが照射によるの鹿ならで己が思ひにみをや捨まし

夏山の梢をつたふむさゝびの人おえられぬかよひ路もびな

戀此歌とてよめる

こよろぎ此磯うちさらしよる波の獨くだくる戀もするかな
仲輔京にのぶるをかくりて木嵐此やどりにてよめる

人もみなかくりのすれど夏草の老てわかるゝ我どかなしき
山 家 苦つたふ岩間の清水せきさめて一人すむおれたれる庵かな

驚 子 涙こそよそふ見せぬ子故おの物を思はぬ日どなかりける
思 子 涙こそよそふ見せぬ子故おの物を思はぬ日どなかりける

無境庵にかりねしてよめる
述 懐 世中にまづむと思ふ事もあしきもどより浮ておらぬ身なれば

風わたる浅田の小田の水ならでうごくに濁るわがこゝろ哉
寄露 述 懐 すみにこぼる心もえらじえらざして美しくもきゆるつゆかな

寄草花 述 懐 かずならぬ身をも歎かじ中々につまれぬ草を實の結びける
寄鳥 述 懐 世中につばめの夏子ちに事もたちおくれたる我身なにせむ

秋 述 懐 秋の野に今の遊ばじうかりけり移るふ花を我世どおもへば

月前 述 懐 わが心をらに見えおバ淺ましく曇りにけりと月やわらはむ

寄道 述 懐 敷まのわかの浦波ながらへて昔にかへる世を見てしがな
更に心改めていうで歌をばよみてむとはなぬれどもどより才なくいつもく同じさま
おて頼もしうらねかくての益なし思ひこえなむと思ふこと時々ありて雨此ふるに

はうなくていひ出むより春雨のふる言見てぞ我世へなまし
棒仲輔京師おはるし後孝三せじも越前の國にゆき伊能頼則の江戸此深川の假のやどり

にひき移り靈雲和尚の早く此國を出ておらねバ我家の月並會やうくに寂しく成もてゆ
ふを澤田ぬし一人此事をいさく歎きて有し世此榮えに二度うへさむと力を盡して四方此

人々に語らひ今年嘉永二年正月廿六日を會始とぞ定められける其日翌明日といふ日の辰
此時より俄お空曇りて午のさがり綿ちらすやうある雪の降出て時此間に高く積りにけれ
バかくての明日の會例の如く来る人やなうらむと人しれず心をぞくごさつる年頃いつさ
まつれる住吉の神おぬりづきてまつるそ此歌

雨ならで身をまざる雪のふる翁いさくみみの助けをぞまつ
かさくらす雪の内に使走らせて澤田ぬしに見せしうバ今およりも
とて使をば歸されぬ此間に雪名残なく晴て日影さし出る程に使して

ふくられし返し東嶺 降る雪此色をば君がいふまにまかせて神の
やめしなるべし

雛をもちふる鶴此ねぐらに歸る

子をさそふ夕べの鶴の一聲にいとさなうりし昔をぞおもふ
菊植ふる秋ういやうしうめづらうみ根をそろへ枝をまうしふるとのことふてかれが心の
まゝみ廣おり靡きて殊に多うりなれば得させよとて折々人の來るふ

我やどの天つ空にもあらなくみ菊をほしとぞ人のいふある
ある夜盗人來りて菊の花を根ごめにどりていぬる

盗まずいどらせじ物と思はれしわが心こそまつうかりけれ
桔梗のふゝめるぞ

いかにしていゝなる時に開くると思へばをかしきちううの花
詠草のはしに歌こはれける女にかきてやる

直からぬことばないひそ言の葉に心の内いあらはるゝもの
神無月の末つ方より病にふしけるふ十二月にありて少し心地さはやぐやうなれば人に助
けられて無境庵に此より見ればいみじう荒れて庭の木葉積置たらむやうにぞふり埋む

同じ時曉方のねざめ

まばしたふすまねばあるゝ庵り哉あら老成さばいうゝ成なむ

身の上の願ひつきぬと思ふよりよろづむなしく成みたる哉

遁 世にありし時を思へばさまゝにうつろひ來ぬる我心か奇

無 常 秋の夜のね覺に残るともし火の有をありとの頼むべしやの

父豊杵翁嘉永六年十二月十七日子此時になむ消えいり給ひにたる

すがれどもありしおもあらずひえわたり魂ぬねせむすべもなし
雅貫が姉なりける鹿女安政元年十一月廿一日に身まかりぬ其からを送りたる山ふて詠る

子を送る山どもまら老もみち葉を折かさしても遊びける哉

閑 雨 夜もすがら池の漣をうつ雨にをりゝうごく閨のともし火

題によらでよめる歌

秋の野をめぐりゝて出ぬればもと來し道のちまゝ也けり
といまらぬ水を見てこそまられけれ淀むの濁る始なりや
此時におもひすてばや世中のありふるにこそ苦しかりけれ

歌島の道に遊びて言の葉の林をむくる人たれう其奥深きはめ其源に至
 らむと思はざらむ榮をあつめ雪を積みて年月をむたり心をくだき思をこ
 がして世を終る輩いくばくぞや或の世中のまげさいとなみにひかれて道
 の上におく心一筋ならず或のあながちに人の上になむことを思ひて心
 の塵をはらふいとまなきなむ多かりけるこゝに我師の翁の下つふさの國
 殖生郡飯岡の里に生れて氏乃神山名の魚貫世のたへに三郎左衛門とぞ
 いひける幼かりし時より歌を好みよみ給へりき其かみ此わたりふのみや
 び好む人もあらずりければいざなひたちし友もなく師とせし人もなかり
 けり然れどもみづから思ひおこして畑うち田かへす暇此ひまにぞ學ばれ
 けるもとより親に仕へてまめやかにおはしければ道の上におく心も一筋
 なりけらし霞たつ春の日のみ山の花を尋ねて思をやり月のくまなき秋の
 夜の古き言の葉を見て心をなぐさめひとり此道にふけれども人の歌をそ
 しりなごのま給はず只其心の薄くなりゆく事をのみなむ常に歎き給ひけ
 る今より四十とせばかりの昔椿仲輔藤原正うら等翁の門たちならしそめ
 て四年五年後に類則の名つぎ奉りぬ長き年月の間なりければ各さまく

の世をへたりけるに翁の親の老ておはするとて家遠くの遊びはなれ給は
 ざりけれど友を思ふ心ふかくはかなく別れし昔を思ひ出ておひ見ぬ今を
 かなしみ手向の言の葉つみいで給ひしことのおれど古人を題とし詠史な
 どいへることの思ふ所ありとてみだりにま給はざりけり又常に我等に示
 してのたまへらく長歌の一の學ふていかに思ひても萬葉集此歌此言葉ま
 らべをならふより外なく其調ならひえたりともいにしへ人のすなはなる
 心に立かへらむいとも難くさりとて後の調おて賤しき心をつけなま
 むのやくなし改めよみおゝるみむおの齡たらねば我の長歌のよまじとて
 早くかきつめおかれしをも引きやり給ひにければたま／＼ちりばひ残れ
 るも其心にあらざめりとて今此集おの長歌をのせますべて一重なるま心
 を喜びて花やかなる言の葉を好み給はま竹馬の昔より黒髪の色かはりゆ
 くまでよみいで給へる歌三萬あまりに及びぬれば家此集撰ばれむことを
 人をこひすゝむれど猶ゆるしなくのみ此まひしを去年の冬父君世を去
 り給ひ九十に近き母君のよみづとふもせまほしきをどく／＼とまゝめ給
 ふにみづからもをれまひて今年春より其ことにかゝり給ひ藤原正堅

三橋鶴彦伊能類則らによみかうがへしめて四の時のついでをどくのへ戀
 雜の類をわかつて載せたる歌千首にいさゝる足らぬを苔清水となむ名づ
 けられたりけるまか名づけたるの師の御心みて其由語り給はねばまらま
 わはれ此集世中にながれ出て汲み見む人のあくわかざるのまらまわなみ
 とちの爲ふのまたあるまじき言の葉のたまれる露の玉水ともていつきて
 はた永き世も絶せず遠きささひも傳はり底のころしあらはれゆか
 け清き流のみなもとを尋ねにむりなき言葉の海にかつきする人もいで來
 なむかし

嘉永七年八月

香取の伊能類則るす

苔清水抄終

檀園集序

歌のよさあしきもさまぐありぬべし梅のおどにはひ高くかをり來て見
 おどりのせらるゝもあり八重櫻のふさやかにして遠目のおどれるもあり
 又なごらかあり見ゆめれど山吹の妹に似なでしこの兒めきておほどかな
 らぬもあり其中あり萩すゝきのかき敷ふべきもあるべけれど大方の花も
 みぢのはかなき色をあらそふめるが多くしていつもどきはなるべきなむ
 世に稀らなる我友肥の道北口長崎の津に其名くはしき檀園のあるじの採
 いでられたる此言のはともよ家の名にかふ熊かしが葉のうち見おその花
 やしくも見えざらめこれぞ此霜の後までふりゆくまじき常葉にして色を
 も香をもえる人のうきにさすべき手ぶりぞかし天保此十年まりひととせ
 む月の十日の日よくうちよみて思ふまゝに記す

橘 守 部

我友檀園のあるじ此里に旅居せらるゝこと今の二十年ふもなりぬべし今
 かく歌人の多く盛になりぬるゝまたく其いざなひによりてなむありける
 さるゝ此人の歌文のさまよ阿蘇の高ねの高き心ばへの野坂浦による浪の
 なみならせなむあるをうつせみの世にえられぬこそいとあかぬわざなり
 けれかくて月花の折にふれたるすさみながき短き歌どもいさるものふて
 いたしへ文のいとあがれる世のさまなるあるゝ物語になぞらへたるたぐ
 ひ何やくれやと年頃ものせられたるがいまの濱のまさご敷つもりていと
 多かるをつくしの海のまづく白玉いたづらに年へぬるゝあたらしどもあ
 たらしくなむされど藻しほ草かきあらはさむこといまだしきものをや
 どせうふなはれざりつるをこたびいかで〜と庭雀すゝむる人のあるに
 いなみあへずいさゝむら竹いざさらばとてまづ短歌の中よりいさゝうば
 かり書きいでられたるゝ猶あかぬ心地すれど園の名におふかしの實のひ
 どり世にぬりいでたるゝ見む人の見てえりぬべしとてとりあへず摺巻に
 なしゝるなりけりつ猶がの木つぎ〜も物せむとこたびいさゝくなむ

天保十年二月

丹波守藤原朝臣永章

檀園歌集抄

中島廣足

早春 鶯 あけぼのゝまだほのかなる春の色をひとりえめたる鶯の聲
 春風解氷 氷むしいはまの清水ながるめり春さつ風やえるべしつらむ
 朝霞 ふく風もなごたる春の空の海にあさみつえは霞なりりり
 暮山霞 山のはいうづみはてぬる夕ぐれのかすみや鳥の啼なるらむ
 谷残雪 鶯もなきていでにし谷の戸にいつまで雪のきえのこるらむ
 曉鶯 さく花のねぐらに風やわたるらむ曉ふかくうぐひすのなく
 霞中鶯 梅柳あずるもわかぬあけぼのゝ霞をつたふうぐひすのこる
 白川の庵ふて もえわたる柳の色も一つにてけぶりながるゝ春のかはみづ
 初午稻荷詣 稻荷山すぎの下みちうちつれてかすみをかざす春のもる人
 さちのやにて いづる日の光の奥ふなりあけり霞ゆるやまの松のむらだち

春 月 さえくし光かすみて長閑なる月の春おもなりけるかな
 庵 春 雨 きゝわびし松のまづりの音かへて雨のどかなる山陰のいは
 歸 鴈 うちつれて歸る雁さへわかれちの心細さをねおやなくらむ
 なく聲のきゆる空まで暮はるゝ心もえらざかりのゆくらむ
 歸雁 浮水 春の雁かへる田のむの澤水にとまらぬ影をなにうつせらむ
 雲 雀 百どりのまだ聲たてぬ有明のそらさやかおもなく雲雀かな
 百鳥にあらそはじとや大空のかをみのうちに雲雀なくらむ
 閑庭 若 艸 あはれおも萌え出る艸の緑かな春きたりともえらぬ住家に
 堇 花 日ぐらしにつめどもあかぬ堇哉うへも雲雀の床をえめける
 閑 居 堇 堇さくかきねの春になりぬれとどふ人もなしつむ人もなし
 巖 路 巖 柴人にうちつれ歸るあげまきぐはるのかも荷の巖なりけり
 風 風 人の病よにかこりて皆人やみふしけるに花盛も近くなれば
 尋 花 ゆけど猶花こそ見えぬ山賤の折りて出しやいつおなるらむ

霞 中 花 ゆさうなるはるの霞の袂よりあまるゝ花のおほひなりけり
 人の花を折りもてゆくを見て
 花 さそふ嵐を何にうらみけむ枝ながらこそひとの折りけれ
 交 花 ささしより櫻が中に身をおきて花より外の世をえらぬかな
 馴 花 移ろはばいかにせむとてさく花にさしもなつさふ心なるらむ
 峯 花 雲に入るどりの翅もにはふらむよしの高ねの花のさかりの
 瀧 花 岩ばしる瀧の上しもあやにくにたをりよげなる花の枝かな
 水 邊 花 苗代おせきよどめたる山水の此どかに見ゆるは春のいろ哉
 花の歌此中に 春雨のはるれば風はふきたちて見るままくなきはな盛かな
 花 下 忘 歸 人のみなかへりし木かげ静めていよくはなにそむ心かな
 花 爲 春 友 春いたゝ花の處をどひくゝて友なき身こそともありけれ
 寄 花 夢 たぐひなく見えし花哉ゆめの内に分し野山や何處なりけむ
 落 花 多 けふも又さそひくゝて山かぜのはてのものうくちる櫻かな
 櫻のいみじうちるを袖にはらふ女あり
 行方なき物ともえらで吹く風にはかなく花のたぐひ初けむ

苗代 苗代のとき來にけらし小山田の柳のさえだきりかろすめり
 野遊 鶯此さへづる野邊のいつこまでさそはれわたる心なるらむ
 杜若 苗代のみづ此みなかみ來て見れば杜若さく野さはなりけり
 山吹 思ふこといはぬ色とて枝さへもうちまなひさる山吹のはな
 とふ人にけふもをられぬ我宿のまがきと頼むやまぶきの花
 山吹露 口なしの色にさきたる山吹のおもひありげに露ぞこぼるゝ
 藤 かもしるき春の盛をことさらにすぐしてさける藤なみの花
 春木 葉がくれおめじろ囀る聲すなりつばきまじりの春のみ山木
 故郷 春 きて見れば昔の庭をはる野ふて董つめるや誰が子なるらん
 新樹 子雀のあを葉がくれおなく聲もまだうら若き軒のならしげ
 卯月ばかり緑川のはとりふて

卯花のささちる岸をどめくれれば岩瀬のきみに小船さぼる
 溪花 谷ふかみあるをたへし岩淵の水さへ白くさけるうのはな
 郭公 むら雨の雲ふきおくる夕風に山はとゞすこゑむせぶなり

夕早苗 千町田にうつる夕日の影さえてはるかになりぬさ苗とる聲
 棟 さげバかつなつかしき哉棟原はなといふ程此花ならぬとも
 賤のをが麥かりはせる山畑のたち木のあふち花さきあけり
 五月ばかり山里ふて

いぶせしや眞柴ふすぶる軒端より畑に似たる雨をふりいる
 五月雨 むら雲の中にある日の影見ればまだ暮どはし五月雨のそら
 水雞 おく露のひかり見えゆく曙のやま田のほらに水雞さくなり
 螢 あらはれてもゆる思を何にまさをりくまのぶ螢なるらむ
 河 螢 ふさわたるよる此川風はやられバ木隠れお此みどぶ螢かな
 水上 螢 あげまさが打落したる水の上をまばし流れてとぶはたる哉
 夏 花 梅雨にまさりし水もおちぬめり淺さはぬまのあさゝ花さく
 鬼劍といふものをわらはべのたをりもて來たるを佛おの奉らざなりなどいふに内心如夜
 又をも救ひ給はずやあるといふ人もあれバ
 色みえぬほどの心の鬼あさみ花やかへりてうたておもはむ
 雨夜 覆 麥 中々による此雨ふやまをるらむ照日にたへしなでしこの花

夏 月 かははりの風にたいよふ姿さへ涼しく見ゆる夏の夜のつき
 夕 顔 日ぐらしのなく山かげの小柴垣まろく見ゆるや夕顔のはな
 水郷夕顔 さいら波ほのくれわたる川づらの里わにまろき夕がほの花
 蚊遣火 いづ方にたくともなくて蚊遣火の烟にくもる夕ぐれのと
 馬上聞蟬 み山路にのりつからせるまが駒を進めがはなる蟬の聲かな
 船中納涼 夕波にこぎ出る舟のすいしき江やあつのかざりなるらむ
 湖邊夏秋 幸崎のうらわのみ秋はておけり松にふきたつ秋かぜのこゑ
 夏 竹 虫 ふく露もたわゝに靡く若竹あわりなくすがるかたつぶり哉
 夏 日 梅雨のいぶせかりしも今更にこひしきばかりてる日影がな
 夏 雨 水かれし夏の山田のむらさめいたみの心にそゝぐなりけり
 行路夏衣 夏ごろもとほりし汗もかきけり並木の松の風のまたみち
 夏 歌 まつら川かはせ涼しき夕あまに駒うちいれて水かふやたれ
 幽栖秋來 蓬生のまむ人なまお見えぬらむさも打つけにきたる秋かな
 客中早秋 秋風の故さと人のなにかれやふきそむるより戀しがるらむ
 七夕風 星まつる庭の燈火まゝさきてふくる夜すいし秋のはつかぜ

七夕月 彦星のわたるほどを照すらむ天のかは瀬のゆふ月のかげ
 七夕舟 天の川あきたつ波のすいしきにすい舟よそひ今やこぐらむ
 夕 萩 かさわけて歸らむ方も思はえずゆふ露なびく小野此はぎ原
 水邊萩 さを鹿のわたりすぎたる山水にちりて流るゝ秋はぎのはな
 薄 あやなくもとまる心かはな薄なべての人をまねくたもとに
 庭を見出して 打ちびく萩のはだちにまつはれて秋風そよぐ朝がはのはな
 女郎花 秋風のつらき心のまらながらあやなくなびくをみなへし哉
 浦上海あて ふきよする荒磯波をさながらに尾ばなにうつす秋の浦かぜ
 草花露 百くさの花の心をたづねてやおのがいろく露もかくらむ
 深山秋風 かげふかき横の下道ふきかくるうき雲はやし秋のやまかぜ
 竹路秋風 衣うつわら屋も見えて一すぢの秋かぜさむし竹のなかみち
 月前虫 なく虫の聲ばかりあそ聞えけれふけわたりぬる秋のよの月
 河 霧 波のおとの下にさわぎて明る夜の霧まづかななる木曾の山川
 九月十一日いささの山陰にあそびて
 霧はるゝと山の秋のそらすみて木末まづけき鳥のひとこゑ

待 月 いづ方に月はいづらむおぼつかな山の端くらき松風のおど
見 月 ふきおくる嵐の雲のひまごどにかげあらたまる月を見る哉
十五夜浦上川舟をうかべて

むら蘆のまげみにきはふ虫のねの中よりいづる秋のよの月
十七日の夜もおなじ川に漕ぎのぼりて

秋風のまづまる波ぞ月ふけてまたこぎかよふ友ふねもなし
長月の半ばかり獨月を見て

水 邊 月 見るからみ涙ぞおつる秋の月まみはつまじき此世と思ふお
虫のねみまがふ水の音とめくれれば細き流につきぞすみたる

湖 邊 月 はこね山秋の夜ふかき海の色のおまりにすこくすめる月哉
舟出して誰か見るらむおし北の野さかの浦の秋の夜のつき

陣 搦 衣 葦なきよるかべのあなふも夜さむえらせてころもうつこ
そむるよりそむる心いもみぢ葉の外に又える人なかりけり

閑居紅葉 くれぬまに霜とやならむ野への露はかなの秋の忘れ形見や
暮 秋 露 秋ふけて色づくあふち實を多みもりはむ鳥の絶る間ぞなき

秋 眺 望 秋ふけて色づく見ればかゝ岡の松のあなふの山田きりけり
初 冬 あしびさの片山嵐おどろへてあわたゞしくもきたる冬かな

庵 お て かさくらす時雨の空にとぶさぎの羽色さやかに入日さま也
夕 時 雨 ふさかくる嵐のくもの絶間より時雨をてらす夕づく日かな

寐覺時雨 更になど驚かすらむさよ時雨かねてさめたる老のねぶりを
十月ばかり山ぶみして

流れくる水もいろくくに匂ふゆり紅葉の木のみ菊の下かけ
水邊落葉 嵐ふく片山蔭のいさらぬちるもみぢ葉をくまぬ日ぞなき

今いいとわびあたれば朝夕のつま木も手づから物きるを例の山に此なりて葉かくとて
うかりける峯の嵐もなかくあかくてうれしき松の落葉う

庵 お て 木枯の時雨をさそふ山のはのむら雲くろくてるつき夜かな
江 寒 蘆 霜枯の入江のあしのみざれ葉にのゑるも寒き風おどかな

寒流帶月 さゆる夜の月に碎くる川なみみ氷れるよりも寒けかりけり
寒夜千鳥 夜嵐のはらふまごの霜の上におりたちかねてなく千鳥哉

浦 千 鳥 わかの浦の蘆の亂れ葉浪こえてみちくる汐に千鳥さくくなり

閑居 霰 世中のかしがましさにかへてさく霰の音此さやうなるかな
朝陽館より見渡して

積 雪 ましばたく烟をゆきの玄たお見て軒端をかよふ越のたび人
夕 雪 さえくし嵐の雪になりけり松の葉老るきゆふぐれの山
夜 雪 ねやの戸に折々風のふきかけてよるふる雪の音をさくかな
山路風雪 たちよらむ木がくれもなき山路哉ふりしきる雪ふき迷ふ風
禁庭雪 ふみわけて殿居まをせる瀧口の弦おどたかし夜はのまら雪
松 雪 嵐ふくみそらはおれて山まつの木末よりこそ雪のふりけれ
衾 庭にたつ麻をひきはし吾妹子がおれる衾にひとりかぬねむ
炭 竈 冬ごもるよその山への寒けさをおのが時なるすみがまの里
向 爐 火 さゆる夜の埋火にのみ向ふかなおれし机もかたはらにして
早 梅 霜がれの一つ木立どおもひつるをかへの梅の花さきおけり
歳 暮 くれてゆく一年毎にみじかさ此まざるや老の増るなるらむ

家々歳暮 たが宿をどひて長閑に語らはむいそがしげなる年此暮かな
火の事ありて家ども多くやけたる後木だかき松どもの枯たるを見て師走の末の方

冬 日 霜どけのかわくばかりの照もせで早くかげろふ夕づく日哉
冬 雲 雪あられふるといおしに立迷ふ雲けしきの寒きふゆかな
冬 鳥 えづの男が芥くゆらす山畑の冬木のうれにひたき鳴くなり
冬 獸 山深きくち木のうつぼふり埋むみ雪を寒みましらなくなり
忍 戀 思ふといいかでまらまじ何となく向ふばかりもつゝまじし身を
忍 久 戀 今更に何うちいでむとはまつる昔もこめてすぎしれもひを
見 増 戀 いとししくまどふ心を一目みば慰むべくもおもひけるかな
披 書 恨 戀 つれなくいさてもありおむ何にかくうき水莖此跡を見すらむ
契 待 戀 うれしきに何か心のさわぐらむたのめおきつる夕暮のそら
隔 河 戀 川水のままされる老らでふる雨にさはるとのみや妹恨むらむ
別 戀 月いなかこちよすべき有明にうたて急ぐすどりの聲かな
深夜 歸 戀 たちかへり今一言やいひてましまだ夜の深きみちしほの露

秋 戀 雁なきて月かげさむき秋の夜を獨ながめてなほわかせとや
 寄 山 戀 岩がねの千重に隔つる山よりもさるしきもの戀路之けり
 寄 杣木戀 杣人のさりさくまさのいさづらにうまさ心をたのみける哉
 雲 ふく風も限ありけりはやくゆく雲よりうへの雲此まづけさ
 不 尽 山 ひさかたの天つみ空にふる雪のいく世積れる高ねなるらむ
 洞 水 風ふか折々おつる杉の實此おともさびしき谷のまたまづ
 林 山 不逢人 われど目か心にとひてわくるかな深きはやしの苔のはそ道
 岸 頭 待 舟 夜を深み呼ぶに答へてわたり守猶ねぶるらむ梶此音もせぬ
 波 待 舟 つかれたる足やまめあいなまつ程の久しき舟も嬉しかりけり
 海 路 かぢどりの謠ふ夜聲もゆさうふて追風えるき浪のおどかな
 朝 海 路 夜をこめて漕いでし漕けさ見れば浪まはるかに山ぞ残れる
 名 所 海 まつらの海浪もひれふる朝嵐に漕出し船ぞおさにたゆたふ
 蒼 波 道 遠 大空もひとつみどりの波此上いつういづこに舟のはつらむ
 海 村 浪よせば流まぬべくもみゆる哉はうなの蟹此浦此まきおや
 故 郷 萬代をむかし契りしたがならむ野となる里の松のひともと

故 郷 風 遠近に残る家居此幾ほともあらし吹く野となりやはてなむ
 山 家 橋 とふ人の歸る送りてめづらしくまさへもたる谷のいは橋
 山 家 鳥 けふもまた笈玄たいるま清水にはね打そゝぎ遊ぶむらとり
 今井某がなりとある流水山家をとひて

山 館 竹 山もとの竹の一むらひとすぢ此道おくふうし誰うまむらむ
 人々うちつれて松前へゆくに
 静なるいはねの水のひいきかなこれや心のまみかななるらむ

旅 行 悔しくも老にけるかな此たびの友の敷あいらまほしきあ
 旅 行 山 うき旅の心ぼそさをふる里に思ふや千々のひとつなるらむ
 旅 行 山 宿るべき里の麓に見えながらくだれば遠きいはのかけみち
 野 外 旅 宿 たれかまた末野の草を結ぶらむ一つかりほおねなまし物を
 霧 中 川 あるのをひあるのを離れて大木曾の山川此なり幾日さぬらむ
 旅 泊 碇網あるすひいきの久しきをまくらにさくもあゝる細しや
 舟はてしこれやいづこの浦ならむ枕に近き海士のさへづら
 旅 泊 波 なぎにける風のけしきをふくる夜の枕の浪の音にえるかな

早崎の瀬門あて

みつしほの瀬戸の渦まき猶早し追手の帆風ゆるみあらまな
球麻川を舟よりくだりて

ましらなく聲もよどまぬ山川を一日あくだる舟路いくさと
淀川を下りて ひきのぼる綱手苦しき川舟の下るのやまき世にこそ有けれ

河 舟 ひるまれどあかぬ川路を淀舟の夜深く此みもひきのぶる哉
舟中聞鐘 里見ゆる磯山さしてこぐ舟をむかへ顔なるかねのおどかな

晚 鐘 幽 いづかたのさがすむ峰の寺ならむ夕ゐる雲に鐘此音ぞする
麓 杉 わけくたる山の麓になりぬらし松より下れまぎのむらだち

虫 扱も世にとまらむ事のたつぶり家をぬひつゝいづちゆくらし
樵 夫 山深くこるやつま木の妻も子も同じまわざに世を渡りつゝ

月夜に狸はらつゝみうつ所
狸まらおもふ心のありわけのつきくしくもうほつゝみ哉

和 琴 古へをひきつたへたるつま琴の高きまらべの神ぞまらむ
玉 白玉をふくめる石のあらめども抱きつゝ泣く人やなからむ

雨中忍昔 ふる雨にこもまる老此つれくよ昔なりせば鏡かさにして

懐 舊 非 一 あやなくも心を千々にくだく哉むかしを今に思ひあつめて
述 懐 人言此さがにくき世の中々に隠れさる名をうれしどぞ思ふ

弓のつか劍此たかみそれならぬ筆どりならし身の老あけり
山かげも何うもどめひよの中へ心からこそすみうかりけれ

獨 述 懐 思ふ事まゐるしかくこそはかなけれ我世の後の人をまつとて
薄暮述懐 あまをまた頼む心のはかなさよすぐればけふの夕暮のそら

ある夜此曉がたに
さまくゝにうつる思の末さえてはかなき物の寐覺なりけり

心ならぬことありて家にこもりおける頃夕つかた鶴のなきけれ
いづ方の雲井をさして歸るらむ我をともなへ天のたづむら

此集前編三冊の大人の俄にかきいでられたるをやがて人々のあへるまゝに板にゑらしめつるなり集中に國を去るさぬ地名のこれかれいでたるに大人の故郷の肥後國なるまゝ今の旅居の長崎のちかきあたりのなりかくて長歌集文集もかきつめられたるをつぎく板にゑらすべくはた此集の後編をもつぎでも此まべきにこそ天保十年正月廿八日筑紫のみちのえりみつまの郡なる大石大神につかへまつる船曳大滋長崎の旅やどりに識す

檀園歌集抄終

草徑集序

此のれ若かりし時よりよまねける歌どもをこゝび板にゑりなむとするおか此まが筑紫のいと歌人多く其中おのすぐれさる人も少なからぬをおながちおよそおまられむの心なくて板おなど物する人少なしさをお此れ近頃此難波お來りてこの友達歌集など物するついでお此れも亦せまほしくなりてかくみどりおはしくいつめされどもとより宜しき歌あるべうも覺えねど世の大人がさ稀おも目どいめ給ふおほらば一歌おても取るべきの取り捨つべきの捨て給はらむこと今更いふべきおあらずをこなる人まねおこそ文久三年亥正月廿日自記

大隈言道



草徑集

清原言道

上卷

春 日 長閑なる日おこわれてやうかぶらむささど流るゝ春の川岸
 歸 雁 かへる雁のへりて春もさびしきに童の拾ふ小田のこぼれ羽
 鶯 いや高くなるかと聞けば鶯のこの下音おもねをかへて鳴く
 春 雪 花もまゝかく咲かむとの程みせお積るか枝のはつ春のゆき
 梅 うめの花さけるやどさへどさしけりをささの里の春の朝北
 水 邊 川水もそなふよりてながれゆく梅の木陰のなつかしき哉
 荒 村 梅 里人のさかりもめでさく梅も荒たるまがき草むらのうち
 水 上 落 梅 ちりしなる氷とけても梅の花とこるもかへずうかびぬる哉
 里 霞 けさみまばなびく霞のれからうゝげて見する高宮の里
 春 夢 ねもしろき梅の下枝の見えおしを折しや去らずさむる夢哉

夜 梅 暗き夜のをちの梅が枝思ひ走も臥屋の窓にさぬる香ぞする
 爪 木 さられつる事も覚え老爪木さへこのめ春おの逢ふ心地お
 二 月 あきはれてゆく梅さへもさかりなる京のはるの二月のそら
 折 椿 うつろはぬ色のと見せて玉椿こぼるゝ花を折らせつるかな
 雲 雀 人にのミ子を思はせて夕雲雀うのの空おのいかで鳴くらむ
 春 日 はしおして身を任せたるぬぶりを心得がほお照を春の日
 土 筆 雨ふまばながるゝ庭のみづよりも頭いでさるつくくし哉
 雉 子 春来ていゆづらしき野のきいすかなその二聲を幾聲もせよ
 野邊 人 うちわさすをち方人の道にそくゆきはつまじき野の景色哉
 蕨 こゝにもと人いふ間にさ蕨のありか失なふ春の野邊か
 野外 小 流 まし水の細き流の居あがらも手をひたすらおあつかしげなる
 蝶 家の内をれのが野おして飛ぶ蝶の野を家おするは故ぞかし
 春 雨 春雨の小さめの土に落もあへ空のものおて亂れぬるか
 たわらのもの乞ふこともことわりお寂しさ永き春雨の空

春 雨 漏 春雨の小雨さびしきひささへふるお音せぬ夕ぐれのやど
 春 雨 晴 たまさかおはれ間もあれど春雨の猶ふりたらぬ雲の色かな
 花 の 歌 つれづれどわびしかりつる雨晴て池の面さへあめるさ波
 ちる歎のちおしほれば今のまを樂しましめて花やあむらむ
 待 花 まちわたる櫻のこのめ歎きて花めかしくもふゝむころかな
 雨 中 待 花 ささぬべき花のさかすて雨ふれば雨を待えて見がはなる哉
 柳 上 微 風 風なしと見ゆるけさだに青柳の心をなたおいとよりけり
 朝 待 花 ささぬるかまぶかと思へば朝戸さへ開き兼ても見つる花哉
 尋 花 なかくに道まどはしと花の山行さきにして逢ふの契りの
 咲く花を尋てゆけばいつよりかこぞし道お道のなりさぬ
 まよひてい昨日の花のありかおもいたりかねさる山の細道
 山 路 そこなりとやすく打いふ山人の道なかくおどやがのゝ里
 初 花 初花の開くる見まば昨日まで世の常おめをそらにせしう
 花 下 誰よりも櫻がもどにちかくおてささへど人をいはぬらふ哉

花下咏歎 此春もかなじ櫻のもどぬしてさらあることを文いはれけり
 花友 おともなきさし向ひなる花なれど誰にも増る友どちぞうし
 軒花 我からの見なしのみおのわらじかし軒端の櫻よそお増るの
 夜花 暗き夜もかくこそわかせ櫻花そこにはありと思ふばかりお
 春山遊行 花見つゝ山をめぐりていくたびもおなじ所のおもしろき哉
 名所花 人言にまざるなごの櫻花めでひろめてもいふおと思へば
 曉花 春の夜のわけがた暗き野へお来てよく見えもせぬ櫻めで哉
 山花 櫻咲く山の裾野のあさばら々まこと繪お似て畫お増りけり
 春川 ひかしよりなあゝならへる花からむ荒山櫻あらゝげもなし
 思夜花 浅き瀬にまろびくして流れ来る枝もさくらの花さかりかな
 家櫻 唯一重まどのへぶてのふし所こゝにぬるとい花や知るらむ
 栽花 誰が里にあるかまらねど二つなきわが佛なるいへさくら哉
 一木花 若くしてうゑつるからお櫻花今よりといはゝなき跡ぞかし
 垂櫻落花 まどろめばよりそふねやの柱さへ一木の花のもど心地する
 いとながらうちまうせてもある花を枝よりはなつ春の山風

花影 眞清水おうつして見まば櫻花このまことおも増る畫ぞかし
 遅櫻 年毎おおくるゝ花をおそ櫻おもひまうてもさやのさかれぬ
 花間柳 たぐひなき花の梢をうちこえてまぶり柳のわかまどりかな
 花下 飲む酒おゑひてのちざりたがへずも又見おくるの櫻えけり
 馴花 なれくして心安きお過たれどなうあしけくもある花ぞなき
 遅櫻 いそがるゝおが心おのしなべてみな早からぬおそ櫻のみ
 折花 なつかしと折るをいなびて花の枝おが方さまお引く氣色哉
 折花 さ枝こそ折るべかりしかつゝさゝて引よちがく花の見ゆるむ
 曉鐘 いつよりか入相の鐘のなりつらむ心づきさるはてのいこゑ
 花間蝶 花の枝たをればささく胡蝶哉已まをさへおいかゝ成るかと
 折花 たむかひもせぬうやあして中々お折る袖はぬる花の枝のさ
 雨後花 雨ふればひと夜お花此色あせてけふの盛のきのふ過ぎけり
 水上花 散うけべをらあかへまおかへされで汀あよする花のたひ風
 落花 垣越えて散りゆく程のよそよりもちりくる宿の風かまの花
 木此本のちまると上あちる花も陰とほぞけまばらある哉

風前落花 さそひゆく力つかれて散る花を流るゝミづ不ゆづる山かせ
 思落花 物毎ふ久しげもなき世なれどもたぐひお過ぎてちる櫻り香
 蝶交落花 ともすれバ散り行く花を送りきて蝶さへ蝶とわやまされけり
 夕落花 嬉しくもさそひゆか庭の面おもてまづめさる花の夕風
 落花有思 散まバとく水お浮べて行く花おまねバ身をやる野をみ思へ
 雨後落花 このもとのかわくまをさお待わへず散しくおは此花庭かな
 蝶 ともすれバ吾妻戸よりせき入りて同じ臥屋お蝶もあそぬま
 思山花 思ひぬの心の程のどいけらバこなこのゆめも花や見るらむ
 花間鳥 咲く花お遊ぶを見れば鳥さふもはむ事此みん思ひさりけり
 花枝 いくばくも見し花なれど枕への一枝おこゝろ止流てぞぬる
 思残花 なみどかや心お残る櫻ばあまささるかの在おやあるらむ
 藤 見る花もなきかと思へバ藤咲きて尾上おゆける春の色かお
 暮春下京 わくがまて見てし京の花さへも夢おながるゝよど此川ふね
 もゝとり 打むれてさしもあきての百千鳥いづきの聲も聞かなくお
 野火 きゆるかと思れば火もゆる浅茅原おの朝露おらぶりのみして

橋 霞 春の野お橋うちわたるわが身をバ霞おそへて人や見るらむ
 老人見歸雁 ゆくかさの老たひ見ながら歸るかり止めがさくも眠る老哉
 風後雨 夕ぐれの空の雨雲風さえてあすのど見しげけふよりぞ降る
 雨中流水 けさ見れば雨の跡さへつくゝも流るゝ水のいとしろき哉
 鮎 流れくる花お浮びてそばえてのまゝ瀬を此る春のどか鮎
 野火 ともすれバ峰までのぼる春此野の火をのがれえぬ松を悲しき
 波 ことまでも夜はふの波の打よせて松おかけさるちり芥かな
 雲雀 かのが子のすぢち誘ひて野の雲雀手も及ぶべき空おてぞ鳴く
 蝶 童への手を逃れこし蝶ならむはねやぶれても飛ぶが悲しき
 土筆 山里のつとどる人もひとりなし鳥のつくしの春のさちおれ
 蛙 つまこふる蛙の聲の一聲のはてのなげきおさへずもある哉
 待月見柳 まかせても水お流るゝ蛙うあむでこそ浪おあつる身えらで
 鶴 いへ暗さかげお立さる柳のまいまど待えぬありあけのつき
 山吹 うちはおく氣色もなしお青雲のそらふうきてもきぬる鶴村
 山吹の九重に咲くをめでながら八重なる見ればやへぞ増れる

漁 村 うらどほくゆきあつまれるものがはみ洲崎お立る家の一村
 馬 野へ遠くかか重なりて行く駒の道をしてこそ敷も見えけれ
 狙 やまと川をさせる駒の渡りあがり堤あついく夕ぐれのそら
 牛 花にがゐる枝のゆらぎみ身をはねて遠き梢おわたる山ざる
 田 まぶくおまが引くを田のおとひ牛うされぬ先お歩めと思へど
 見 幾度うまごのひま行く駒ならむ千町の門田すきかへまどて
 山 旅 客 馬 われもまごさてこそ行かめ打つまて旅人姿見ゆるまのめ
 家 山里の清き川瀬をむすびあかて世此ちりなきを水お見る哉
 双 住めば又こゝもわびしく成おけりすまで住まよくしき山里
 さ 花 花のれさへ面白けれや山鳩のけさの友なきこゑをそるへて
 夕 垣間より近く見るをもまらざしてさゝさすがるおやまの花
 夕 日 夕日影木のまをもりて幾筋の庭お見せせるさぬのうすは
 灯 灯とわれどいはかなよひくお物もえいはぬ業くらべして
 夕 鳥 あらつかさ荒る風お向ひてもかへるの歸る夕おらすかな
 山 鳥 とびおくるのばさ頼との山鳥人あなづりのわざのまどする

雞 羽音こそまづ嬉しけれ庭つ鳥をよその如くなくを待つ夜ハ
 庭つ鳥羽うちさするはぐくまをもりいでて子の有が悲しさ
 假 面 昨日までまろびし玉のわれからもけふあされる鳥の雛哉
 鯉 いづこおか行くと思へばゆさけくも尾をふり歸る片淵の鯉
 人 人の面のまこと生るゑまひ哉土ども木ども思はれなくお
 作 りえしいもが稼ぎの裸むぎ蝶とならでもとびゆくがうさ
 妹 が背おねぶるわらはのうつゝなき手おさへめぐる風車哉
 風 寐鳥うつよはの火音おねどるきて空お亂るゝわし田鶴の聲
 鳥 銃 何事ぞ五十六とましがほおわが世なくなる老の身のはて
 老 やがて又底あらはれてあぢきなし鼠もはゆるよねのまら櫃
 櫃 親なけば子さへ泣くきり世中のせむまへなさも何も知らずて
 子 末の世といつより人のいひ初て猶よの末おならぬなるらむ
 世 身おかはぬ事のまひいていつもく歌の心お耻ぢ思ひつゝ
 歌 つのぐまし浦の蘆原いつのまおやはらぎ靡く夏のさぬらむ
 夏 蘆 よそよりも夏おなりぬる程みえて明はなちる川づらの宿
 水 邊 首 夏

篋 扇 箱のうちお入をふし扇取いでて己がえ知らぬ風おあてばや
 尋 郭 公 こゝおてと思ひてこしを影もなし山河のみ此ほどゝぎす哉
 五 月 雨 見渡せば野の海原おなりはて、川こそあけれ五月雨のころ
 蠶 婦 五月雨のをやまもあへず軒お落つる玉の糸おも又成おけり
 夏 草 中々お桑子飼てもいとなしおうまれ合ひさる身のまぐせ哉
 杜 若 ねこの子の首の鈴がねかすかおも音のまじさる夏草のうち
 里 螢 かきつばと咲るあさりお行き歸りさもあやなして過る澤水
 暗 夜 郭 公 河邊より里お入りさる田づさひお來てい出でつゝもく螢哉
 雨 中 郭 公 暗なれど行へささかお時鳥とほざかりもくこゑのひとすぢ
 桃 實 村雨のそらをくだりて夏草の末はらひもく野のほどゝぎす
 紫 陽 花 居並びてあるさお暑き夏の日お身おまを寄せてなれる桃此實
 浮 草 此朝々ひらきし枝の色おどおかさへきのふのあざさるの花
 茶 摘 種ぐちあけし水音けさの聞えきて垣内のいけをいぬる浮草
 蝶 夏くれぱみまぐし野の少女どもいかお群てか木の芽摘ると
 よそおして立つかどこれお飛ぶ蝶の又すがりぬる姫百合の花

夏 日 空をこそむかひかねしお水よりもおもはゆき迄照す夏の日
 露 雨 雨ふらぬことしの夏の庭おさお玉ねくさゝの露ぞかなしき
 す い み たそがれどわかずなり行く橋此上お聲知る人のつどふ頃哉
 蕉 風 吹く風を芭蕉此葉してあふぎ入る窓のうちには、取べくもなし
 夏 山 唯一つ生ふる木もなし間近くのさでても見まぐしき青山
 夏 夜 物もへお寐覺ながらもめを閉て明けしも知らぬ夏此短か夜
 橘 立 このもどもをさまお遠く散りもこで風おこるゝ園の立花
 夕 立 夕立おさして行きかふ市人の笠のひがさおなりあけるかな
 夏 獸 夕立の晴れてし見ればけふの内お暮て明さる一夜なりけり
 雨 中 夏 山 恐しき景色のやまて夕立のつね降るあめおなりあけるかな
 な で し こ 夏くれぱ野邊の牡鹿の角落ちて己が妻さへ見もあれじかし
 夏 野 里遠き野お咲出でて只ひとりのあやもなげなるなでしこの花
 今年おひの野邊の牡鹿の角さへも枝さすばかりなまる野へ哉

鷹 飛ぶ鷹のひと羽二羽のはぶきおも行末やすく見ゆる乏しさ
 鳥 よそよりのいづれも同じ村鳥おのが妻こそつまもみ知らめ
 わ さ い 村雀ひさしおあさる音さへもいつよりさし朝いなるらむ
 夜 思 胸せばき夜半の思のわがならで明くれはいさく變りぬる哉
 雨 二日三日ふればふるとてわびおけり雨待遠いふうと思へば
 山 姿さへ所かはればかはりきてまらる山の名をとほれけり
 行 路 風 くまぐまかくれくも行く物を身おさしほて、吹く嵐哉
 旅 松 たふれふま松ぞかなしき其如く旅路の末おならむと思へば
 旅 情 宿るべき里見えきてもいくさびか今のちかしといおふ松陰
 旅 情 すゑとほくまがひ路もなき一筋を見てもつかるゝさび心哉
 旅 情 かたぐゝあ旅のゆけども行末のさきから死出此山路之けり
 旅 情 家のうちの狭きいぶせきいとはねど宿かしかぬる夷此山里
 旅 情 心のともどこし方へ歸すおもとくいのさらでとほさふる里
 旅 泊 家あてのどかくいはれし木枕の高きひさしもなき旅寐かな
 旅 泊 昔わが住しあさりお船とめていまの旅なるうさねをぞする

旅 別 うさねする湊のわびしさ波さへひさくどうつ音の聞えて
 思 旅 今のわれいく里々うすぎつらむわかれかねる心ながらお
 山 越 旅 わがこゝろ旅あなり行く寐覺おの家も出さくおこふる古里
 山 越 旅 さこえまバ猶こまぶかお道間はむこなまお行くやまがの山越
 山 中 一 家 水谷のや坂の山路おえかねてまづこゝまでとさぬる一つ家
 行 路 路 行くまゝお家續きなる都路のいつこの程おひなび來ぬらむ
 行 路 路 遠くありてよそより見ればいつもく行かふ人のゆさけかりけり
 わ さ し 行く水のわきて流るゝ廣瀬川わされば又もわさりなりけり
 行 路 川 さきの川の堤のながしやすらはむとつおもしろき所えらびて
 隣 郷 所せくとなりくをへぐてさるよの中垣のむつかしげなる
 故 郷 家もなくなりぬるおのが故郷の道まるべする駒のかなしさ
 老 郷 ひとつしかど我とりなれて後手の老のすがさ誰おならひし
 わ ら は 何おとか遊ぶおそばぬいさかひもなくぞ限のわらはべの友
 山 路 行人 はるかなるをちの山ばな來し人此又見えくなり暫し隠れて
 雲 影 爲 龍 程もなく雨ふりぬべし西山おわさかまりたる雲のたつとゆ

里 わづかおも梢見えきて行くまゝ、お廣田のさとの民此並くら
 閑居 松 松が枝のとゆきかくゆきくいり合ひて行へを見れば寂しくもなし
 月夜軍士 まひさしの内まであうく光りあひてわがむな板を照す月影
 猫 衾さへいとおもげなる老の身此ぬるが上おもぬるねこま哉
 歎 世の中の人のおどろへいつもく、同じことおて聞ぞ悲しき
 半 死 あるかひもなき老の身の生ながら死出の山路も半へあけり
 芭蕉 身をよきて我行きかへば芭蕉葉の心のまゝ、お廣葉なりけり
 蓮 散はて、花のなけれど同じ香を猶のこしゝる池のはちす葉
 朝顔 程もなく枯るゝいとほ老朝顔のかいやく日おもむかふ一時
 雨 程もなく枯るゝいとほ老朝顔のかいやく日おもむかふ一時
 貧家 さゝまてゝいひさく親の見ぬまおも聲の限お泣くうなる哉
 初秋 昨日よりさらおも空の秋めきていろかはりこし日かか月影
 三日 初秋の梢をわさるかぜの上おちるかど見ゆる三日月のかけ
 星 川といへば川おも似たり天の川これバ二つお末のまわりれて
 牡丹殘花 大方の散り果てぬれどはつか草おの一花のみそろうぶお経よ

佛 祭 麻がらのもゆる限りをわかれおてたまかくりする杉此下門
 月會 出 月影も出べくなれば山の端もいときはあどおさやかなる哉
 戸 面 面白く月さしいるゝ妻戸よりわりなくいつる夕けぶりかな
 まどの月 うつろへばさし入るよりも哀なる窓の一重のかまおしの月
 庵 伏庵のおくまでちりも拂へるをさのみいらでいぬる月影
 月前 虫 くもといへばこれれも月の前あして妨げ顔にすかけぬる哉
 閨の月 おもはえず枕がもとのさやけきにまろび起ても見たる月影
 閑居 月 たまさかに戸を開ければ月さにも聞めづらしく入る景色哉
 殘 月 をしむまに伏屋のうちを出はてゝすのこのはしに殘る月影
 雨後思月 雨やまておらはれかぬる月影にたえまも雲と見ゆる空かな
 松間 月 そなたへとよくこと知らぬ松ゆゑに所かへても見たる月影
 雲間 月 月影の晴れたる空にさもゆきぬ隠せる雲も知らぬばかりお
 川 月 もやゝながれて行けど早川の水のゆくお任せざりけり
 山家 月 まどもなき殖生のこやのそともより入る方なげお照す月影
 月下無酒 月清みさけいと問へど少女どもゑきて答もなかに見ゆなり

月下獨酌 三日月の入るを見るまもなぐさめのなきおの増る酒の一杯
 雲間月 いま一重くもを出れば雲もなきそらなる物を知らぬ月かな
 雨後月 雲うまきどころくのわづければいつこも月の在がはあして
 寺月 なかくに軒あらはなる古寺のはとけの面を月ぞてらせる
 柚月 立並ぶ柚山松をきりしよりおもひもかけずいつるつきかな
 大路月 只ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれどのものぞ廣き大路の
 管屋月 珍しと見る人なしに月かげ此もるを常なるどまやかさかな
 月前虫 出しやとれどろき起て月見れば枕のかげあよるさりとす
 すゝき 打招くわざのまならで花薄いあみさまあもふるたもどかな
 秋風 秋風おかど田のいなごふうれ来てをりくわたる窓の音哉
 萩 亂るればつくるひかへて萩は花ひと夜にもとの錦なりけり
 風前薄 秋の野のいとさむければ花薄ふしても風をどほまなりけり
 久留米柘植信厚七草園此歌
 閑居夕露 さびしあひて尾花くず花なでしこの花おも咲ける朝顔の花

獨居月 かくれ居て我跡さらぬ影法師のならびてさ月に月をみよかし
 窓の月 照る月の猶てらせれど窓の戸に影はづき行く花すゝきかな
 十五夜月 かつくもかけおし程の歸り來て又まとかかる望の夜の月
 月前渡舟 山陰をいつる川瀬のわたし舟なればよりこそ月お見えけれ
 垣秋風 あし垣のわれまをもるゝ秋風お柴さし添へてふせぐころ哉
 蟬 なき立る庭の木毎おなく蟬も枝ぐくれまるわきのやまかせ
 尾花 さして行く人の心もまき顔あうちうなづきてさつ尾花うさ
 露 所せく草の上葉のはしるしてまるびも落ちぬつゆ此白さま
 霧 かく山此そがひ此堤けふゆきすそ野おあがる秋の川ざり
 女郎花 をみなへし今やさかりお成ぬらむ枝さへ花は色おなりさぬ
 きりくす さしあへぬ衣あがらお秋更てついでともいはぬきりくす哉
 田家人來 田の面より我門さして來る人の近づかぬまお誰と知らばや
 砧 ⑤ さが里もきこえ合せてうつばかりうては何處もうつ砧かな
 そやづ よく見れば門田のそほづいつもくそきたお人の在る心地して
 なるこ 人あしと見ゆる山田のさぶせより思ひもかけを引く鳴子哉

果 枝にいて見れば浮みてかしのみ此數も知られずよる汀哉
 栗 幼なげに枝垂れぬれば笹栗のいかなる様もけふく、いさし
 芝 年毎お枝はひしほみ見ぐるしく筋此みのこる軒のくりの葉
 栗 山寺の秋さびしらに佛たちたゞあらびてもおはをばかりぞ
 旅中 家あても妹が打てし麻ころもこともの、ごときく旅路かな
 百舌 聞き知らぬ人もあたまし様々の鳥が音まぬるもその空音を
 栗 散り積る木の葉の下此手さぐりも籠もるばかり拾ふ山陰
 市 雁 うれしくも市の大路の一筋にゆくかゝ見ゆるけさ此初かり
 稻 妻 ひかりつる峰の雲ま此稻妻のまてばまたく景色のみして
 桔 梗 童どちわろびたはぶれ一つたあさけは摘取るさちかうの花
 思 旅 秋風いさむけくなりぬ我君の遠きひがしおおはしつく間お
 川 紅 散しなる汀おもみち浮びきてそればまぐる、かは上此さど
 あ 夕暮の空つらくにゆくさづも雲のはさてによるあらし哉
 田 雁 いつものく庵にそひさる物がほ外面の小田お來ぬる雁金

稻 妻 さまぐの光あらはす稻妻のくものねみゆるいかづち此山
 雁 妻 あら磯をふき越え風の寒げればおもがくし、てねたる雁金
 市 初 雁 空せまくみゆる市路いみるさびお過ぬるあどの初かりの聲
 山 夕 日はてもなき山の紺野のまゝ原遠く行ける夕日のまして
 山路 牛 まなく散る木葉かづきて山路より出くる牛のすどき夕ぐれ
 鹿 宿ちかゝ草分入し小牡鹿のを此へおいでていつか啼くらむ
 嶋 鹿 珍らしどきく小牡鹿の聲毎お末わびしらになるぞかあしき
 山 鹿 汐干さるすささの程も見えぬ夜お遠くもゆける小牡鹿の聲
 野 一 路 小牡鹿此遠ざかりゆくかげさへもはてのあくる山此細道
 閑居 庵一つもちたるのまや野おまてて牡鹿おかはる我身なるらむ
 山 秋 風 目の前お一つ落たる松の實のさらおもおちおくる、けふ哉
 ひ 少女らが山のそばかる秋風おせおおふ子さへおりなくぞ泣く
 わ 守る人もかけたる繩もゆるびきて水田の面おひさすころ哉
 ら は 風吹けば庭の木の葉のよるばかり片すま毎おぬるわらひ哉
 秋 港 秋更けて凄やさむくなりぬらむそばうりめぐるさよ中の舟

蘆 火 流れゆく入江の水尾此さびしきに影移るひてたく蘆火かな
 雨中桐葉 はてもなき軒の雫にいつまでううたる、桐の一葉なるらむ
 萱 庵 よひく、お遠き方より更て来て山べ此おともなるいはり哉
 吹かはる風にはむきのわきかねてあびさまどへる前の萱原
 山 萱 谷陰のこゝにかしてお片よりてさびしかるべく見ゆる山里
 家 遙かなる木の間お見ればせきし戸をけふの開けり谷の一家
 我宿をこゝおもぐなど都人いひのこいひてままぬやまざと
 巖 行きかよふ人おの遠くよきさせて道のこ中おたついはは哉
 谷 川 こゝおきて又こゝおきておつる哉我さへ下る谷のかはこづ
 山 山 山々に立ちもならずかまど山おのれひとりぞ高くふふとき
 山 郷 大方いあるじいなくて山里いとなりだのこの引たて戸かな
 只一夜やどをかりぬ此枕おもこのみまるべる秋のやまざと
 そ や 秋の雨のふるてるなしお笠きたる山田のをやづ疲れ顔なる
 山 家 流木 ゆく水のさいれおあさるさ音おもまづけさえるさ秋の山陰
 網 鳥 おはれきてどなまおかゝる群鳥のちいの聲さく我を苦しき

山 家 灯 灯のもとにかたらふ人かなも松のはこしお見ゆるやまざと
 山 雨 かやの山此面の雨の風もなしぬる、まつさへゆさげなる哉
 畦 表のみめでたく見えてぬひ物の裏むつうしき世おこそ有けれ
 枕 織 もの毎にこど少きがうらやましくおくればなげのあのが手枕
 醉伏せる身を遠ぞきておぢきなくよそより守るねやの木枕
 いざと思ふおしたの床此おさうさお枕はなれて手枕ぞする
 灯 うしろおも倒るばかりの居眠をどがめぬものいともしえけり
 かゝげたる時のまあかし灯も我ぬねぶらぬおぶらぬひて
 桶 人心くちてはなれて桶の輪のこかれく、おなるぞすべなき
 枕 身一つおなりぬと思へば並びさるたおの枕のかさぞ悲しき
 書 塵 いつよりかひらけあがらの窓のふき風ぱうりこそ翫びけれ
 人なげおめの前をしも行きかひて塵さへ我をるるめつる哉
 拂へども立まふちりの去やらでたいおき所かふるなゆけり
 枕 うさゝねの昨日のひるね思はせてありしとおるにある枕哉

茗	幽	坐	破	短	庭	蟻	鐘	睡	俎	蜻	山	貧
窓	窓	睡	笠	日	板	蛤	莊	居	居	居	居	居
山吹の花をあるどいなければどもこのめも同じ色に出づらむ 木の間より夕日の影のさす時ぞはじめてあかさ松のまの窓 何事をなすともなくていさづらに窓のもどおも老おける哉 誰うきていつ歸りけむ思はえを我が居睡此はてもなき間に 軒端かつる雨おひしげてうさるれど昔おぼゆる竹の皮がさ 何をすするいとまもなしと年毎ふ日のみじかさをわぶる頃哉 くれやまき日敷重ねて年の間も秋よりのちの程をみじかさ すみなしの心ふかさお何となくありげなる庭此松むら 童べのこゝにありともまらすれど見えぬぼりあさまる老哉 遙かなる聲するひまにうちませて近くもひやく入相此かね 老此身のいだけるひさをあちきなく幾度放つ眠りなるらむ かきまらぬ魚の命いさの上のかさな此跡にまるしぬる哉 世中のいづれおめをもどめがたき空お亂るゝ秋のかげろふ よそのとど谷を隔てゝ家いあれどかれも我住む宿の内なる うちはへてつねに成ぬるかねおひめ扱もうからぬ我心から												

田家暮秋	九月	初	木	初	池	夜	都	時	海	時	窓	時
枯	冬	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨
少女らが箕をひる風にちるもその寒けく見ゆる秋のはて哉 あおおとも限りど聞のうかりけり秋を果なる我身ならねど 今朝見れば雲も木の葉もそなへど行かぬ物なき冬の山風 袖さへも吹きとりつべき木枯あうべ止まらぬ嶺此もみぢ葉 初時雨今ぞふりいづる水鳥のどもぐるひするかさの波間お 池の面お見えてい消ゆるちいのわの亂れ重ねおふる時雨哉 さ夜時雨ふる音さえぬ妹とわが聞つる末をきりしばかりお 東山のぼりもはてまづ見れば都此まぐれ鳥羽おすぎゆく 人まれば時雨おなりぬまきむく此のあなしの山の雲の行末 海廣きかつらの浦の沖おいでてふりはなちさる初まぐれ哉 はるかなる磯のす崎を歩きはてゝ波路おうつる村時雨うさ せきはてゝいづこもわりぬ闇暗お窓を去りても打つ時雨哉 薄雲の見ゆとも見えぬ空よりや降るともふらぬ時雨ふる覽 さいよひて今までありし中空の雲くづれても時雨降るなり 大かゝり空晴れし日もいづこありまぐるゝ里の見ゆる頃哉												

夕されば音ふりわきて村時雨まぐる、うちみまぐまぐる哉
 市時雨 み山べのも此さびしかる景色もて市あふりくる初時雨かな
 雨後庭 あらひ出でし庭の眞砂のふり過し時雨の雨のまける也けり
 木枯 窓あきてすがるさゝぎもゆくりなくまどひ顔なる木枯の風
 冬山 夕暮の里のまぐれあちかづるでかゝ山かげあすめる月かげ
 桐葉 散りそめて珍しかりし桐のはの葉を今いえたあのことける
 山家寒夜 唯一つ夜半の枕あまるびこし木葉うおきてさむきやまざと
 風前落葉 風ふかば暫しもあらずちりゆかむ景色さちても見ゆるもみぢ葉
 風吹けば亂るゝ鳥あこさませて同じけしきあゆく木此葉哉
 雨前落葉 あらし雨ふりくる空此景色あゝあたらぬ先あ木葉ちりつゝ
 山路落葉 山風のさかおろしなる谷の道我よりさきあゆく木此葉かな
 落葉何方 もみぢ葉のいつちゆくらむこゝあことを積りてあれといふ方もなく
 軒落葉 けふふさし庵の軒端あかねてより散れるが如く散る木葉哉
 葛落葉 松の葛離れがてあゝまとへれど其葉此紅葉もろくちりけり
 風後爪木 よすがらの風のたまもの拾へどか木陰あ落し木々の枯えだ

つは 家もなく成ぬる宿の跡をしもよすがあさける石此もどつは
 梅もどき 昨日けふふりし時雨の色づきて實さへ花なるうめもどき哉
 冬山 いつしかと冬も半あなるまゝあわがた山の寒くそびえて
 霜 寒しども思はざりしを埋火のもとはなるれば霜夜なりけり
 まばらなる庭の落葉の上あはまかくかど見えてのこる朝霜
 さればこそ霜ふりぬらし人あきて雪の如しといふ聲のする
 おほひさる庭の霜の寒けれどまたさのもしくつむ爪木かあ
 老ぬればふりぬる霜此恐しき物あそおきて見まくほしけれ
 わけて來し野あての露と消ぬるを霜のまもなるかまの山越
 行路霜 朝日影まぶよくさゝいで大船のかげのをぶねあ残るはつしも
 泊霜 くらさうえの汀の鴨も神無月ゆきめぐらふにやすきこのころ
 鴨 冬枯の入江此蘆のくまごどあ入りての出てゆくかもめかあ
 寒菊 いづる日のさしくるからあ匂ふえ霜あほほひの笠かけの菊
 寒菊 睡りつゝ汀の鴨は見るめあも身のはづかしきいとまなま哉
 述懐 窓の戸あふりくる雨のあめながら音の散あはやなりあけり
 わられ

いかめしき岩あさりてどびかへる霞こそいと荒々しけれ
 霞ぶみ枝づたひして降るも此をなよびもなしお立つ冬木哉
 水鳥 浮び出て見ていかづけど水鳥此沈めるまふもかはる世の中
 千鳥 わまの家お伺ひなつけたる物ならであされる門の磯千鳥哉
 管屋千鳥 波比上月かたぶけば浦千鳥飛ぶかげうつるあしのやの窓
 川千鳥 行く人の近づくまゝお又さちていや川のぼる川ちどりかき
 閑居水鳥 かはせまの水お立入る音ぶおもたえて聞えぬやどの夕ぐれ
 夜千鳥 親と子のまかちもなしお終夜ひなの聲して鳴くちどりかき
 風 木枯の音恐ろしき夜のま哉かるくし身いどりも行くまで
 待雪 音もせず更行く夜半の静けさふふるかど雪を思ひつるかき
 山雪 みる人もなき山陰のあかしくふり捨てこそ雪もありけれ
 雪中山家 朝ああさお積れる雪を湯あさきて谷此清水もくまぬころ哉
 風雪 我門を入りてせくまで追風おひきさてつもるそでのまら雪
 閑庭松雪 松が枝お積りあまりて庭お落つる雪のま雪お跡いつけたり
 橋雪 跡もなくふる雪まれば橋の上おうべとめふるうま車かき

いつしかと空しくなりて降る雪の寒き夜ふたく炭だわら哉
 炭中鳥 宿るべき木の間もなくて飢鳥のなく聲かなし雪のふりつゝ
 雪埋火 手を上おおほひて見れば消おけりまだ有ものと見てし埋火
 寒雨 夕さればわらはも老も泣くばかり雪より寒き雨のふるらむ
 晦雪 寒ければ一夜二夜お出てきてまばしの月のふゆでもりうあ
 夜雪 まつのまの灯あかき窓此月おふるうか見ゆる夜半の白ゆき
 水鳥 浮沈む渚のかもの波のうへにまがこゝろさへあらせつる哉
 行路寒風 我里を出はなれ行く川此べや寒きあらしのかぜのかよひ路
 水鳥 水鳥のたちて跡なき川の面おやがても落ちまふ一羽かな
 社頭雪 いづ方もましろくなりてお前なる鏡のうちもつもるまら雪
 川千鳥 冬くれぱいとあさびたる川中の水尾渡りするとも千鳥かな
 冬夜 ものすむく月をかくしてすみぞめの雲恐しき冬の夜のそら
 冬雲 寒ければ居ぐくまりさる嶺の雲たな引てこそ秋の見えしか
 寒夜 親も子も打そゝろひてそば湯さへ霞ふる夜の哀れおぞ飲む
 冬野 野へ寒さかへさる樂し我宿にかまたる酒ものこりありやと

杉 社 故 烟 荒 鼠 研 袞 假 葉 羽 鏡 汗 毛 輕

頭 杉

郷

屋

面

石

まきぐなる杉の風をれ世の中お曲らで立るまるとぞ見る
神のます宮の守りの杉なればおのがほおこそ立て並べけれ
昨日けふ作りし家も世にわびてまた故郷になしつべきかな
おもげおも動かぬ里の烟かなかせどもいは吹もあへむを
人なしと思ひあなづり家の内お竹さへ生ひお生るあばらや
さ夜中の風のおとみまぎれ入て臥庵こぼつふゆの野ねまみ
あさりうる事いなくして朝夕あすりの海のひがちなる哉
起出てわがぬぬくめの麻衾をしくもさますふゆのあかつき
ともすれば鬼の面をあらはしてかりおもあらずある此世哉
我心ゆるびがちなる七此緒のならぬことこそ得物なりけれ
人毎おたまなくなれば身も朽て塵はく鳥の羽ばうりもなし
うちおぶる影をかくして哀れおも嘆きふくもるます鏡かな
世の中のわりなき聞けば人知れずひなてに握る手の内の汗
世此中の治めがたきや是ならむ一毛ぬくおも身さへ動けば
水にだほうくかる石のかるければ沈む時なき身のやすさ哉

冬 小 虎 雨 少 老 歎 述 門 雨 行 灯

衣

石

兒

女

世 懷

川 路

暫しだみ寒きあたへで一重なるゆわび衣になつをこそ思へ
いのこおももてあそぼる玉座の道此石くれ誰お似たらむ
用以ねば虎も猫なる世の人をかたちのと見て定むるがうさ
雨ふればおつる雫もひまなきおかたぬせげなる軒の下かけ
けふ見れば少女お成ぬ去年までの一足しても飛しから老や
老の身のゆがと衰へ今更おすくなるみちもえこそゆかれね
老人の驚るくばかりかはる世も唯うち聞てあめるばかりぞ
よそめのともて隠されて世のうきめ見てもぬふりも哀いつまで
おのれさへ骨身おそむく世の中を人なつけてと思ひつる哉
早くより人の用ひぬ我身もて老いさる故といひけさるらむ
岩の間お隠る蛇の入さしてすゑわづかなる老此世ぞかし
けふも又わがやお我身のへりきぬ限此門出いまだこずして
雨晴し空おかくれていつまでか濁れるまゝの川せなるらむ
行くまゝお寂しくなりぬ里はづれまばらお家も細く成きて
をりくおわが睡りての灯もうたてあるべきお向ひぞかし

行路 梅 梅かをる風あまよひてそなたへど俄おをるゝさどの中もち
 折 梅 打垂るゝ垣根の梅を引よぢてはなつも折るもをしき枝かな
 夜 梅 暗き夜の見えぬ敷をそきたよりいふばかりあもか然る梅哉
 鶯 梅 うちそへてなげや鶯あし垣此くま戸此梅此ひらけはじめあ
 月 前 梅 梅見れば梢の月もかたぶきてあらぬ雲井をさすたち枝かな
 梅 香 梅 うめの花咲あし日より敷ふまばそらぶきせぬもあはれ一月
 朝 鶯 鶯 朝まだきこゝら鳴なり夕暮に聲此こしてもねぬるうぐひす
 寐 鶯 鶯 うめ此花思ふばかりの枝の樹を心あうゑて見るねざめりあ
 雪 中 梅 雪を重みたわめるまゝふ梅此花よぢとらるとや思ひをるらむ
 窓 梅 窓ちかく打よきてきて梅の花紅のぐ手をさへつくる顔なる
 梅 風 梅 かばかりと思ひし風あけさよりの花もまじりてぬくる梅園
 春雨 會 降 降出でてさびしかるべき春雨のけしきふくめる谷の杉むら
 閑居 春雨 何とをいへども寂し春雨のふるやのまとぬ打えめりきて
 江 春 雨 まとぬしてのむく見ていかならむなごの入江の春雨の空
 土 筆 何事もえうゝぬ筆を少女どちとりあらそへるつくくし哉

霞 少女ども野べのち原お取つくしあまきて見れば又立あけり
 たはやすくあらはしもせで海山を見まくはしなくあす霞哉
 此朝けをちの松村きりいでてあるかど見しのかすみあむこ
 そことなくあらはれ出る野の霞けぶりならぬ本立もなし
 花折て夕川わたるをどめらをけしきあこめてよつかすみ哉
 はあいまぶ咲きも出ねど頃はひの空あまらるゝ春雨ぞふる
 花盛けふぞと思ふまとぬをばいつあせさする長雨あるらむ
 待 花 いざといひて木下さらまわがまたばさの咲かましや花といふとも
 ちかければ咲かぬ景色の花の枝めあよく見えて物ぞ佗しき
 日敷へてひらかぬ宿の花故お口をどぢたるこゝちこそすれ
 庭櫻まださかきやと人々のとひのこたへもつらさあろかな
 よく見て此のちの詞を櫻花まらわたるまをあちよしどの
 花 始 開 いづくよりさきくはゝまる花あらむ在し苔の敷ならなくあ
 曉 花 見るものゝ色わかれくる明方あいつよりあるき櫻なるらむ
 尋 花 さそいつる人跡とめて花の山おくれればせふもはせつべき哉

折花 やめかねて今一度とさくら花まらちる枝葉をりてけるかき
 夜落花 時くれバ見ゆる見えじのわかちなく花の心も聞ふこそちれ
 風前落花 ともすればこそままじき塵をさへ一つにさせる花の下風
 雨中落花 折々の雨のまゝにもまたがはで横さまにちる花も見えけり
 落花 風吹けば庭の塵さへ木此もとの花此なみにもさざつる哉
 ちりうする花おほからし木の下につもる限がさきし程か
 わが前ふいつか散りきて居睡のほどともまらまおける花哉
 ちりぬれば所せからぬ庭の面も一木此花になべてふさげつ
 惜めどもとまらずとかやいひ馴てさておかるべき花からさくに
 とかり人こゝろもなきに心なくちりもくも此の櫻ありたり
 いととくもちりて朽ぬる櫻花老あまばもさわざのこぞする
 折らるゝも覚えぬ程に手ふるれど心えてちる花此えごかき
 散りもくと思ひもあはず川水あうきてまふくる花さくら哉
 二つ三つけさぞ流るゝせと川の花のさき追さぬるばうりに
 たが宿もちりぬとさして我宿の花ふるろしき夜半のやま風

水上落花 散りもくと思ひもあはず川水あうきてまふくる花さくら哉
 二つ三つけさぞ流るゝせと川の花のさき追さぬるばうりに
 たが宿もちりぬとさして我宿の花ふるろしき夜半のやま風

瀧邊落花 櫻花ちりしなごりのこもづりにはてさくおつる瀧を見る哉
 遅櫻落花 今さらにおそきをまりておそ櫻ちることのこを急ぎつる哉
 野外小店 唯一つかごに立てたる板戸にも吹く風よくる道此へのいは
 小鳥 さへづれる聲さへ細きこがら哉さばかりにても鳥の數も
 山家山吹 そなたおは窓さへなくて山里の家のそとものやまぶさの花
 柳 さし柳さしていくかもへぬものを根ざし引見る友わらは哉
 燕 大殿此高き軒端のつばくらめはるかに見れば今ぞすゝくる
 鼻 いと長き日をねくらして鼻のねざめにぞなく夕ぐれのこゑ
 煙 おぼろなる月にも見えて芥火此きえしあどより立つ煙かな
 旅泊 松も生ひ岩もならびて船にすらとまりくゝお庭もこそあれ
 未來 年を経てなきにまざるきをよき事此あるべかしくも思ふ行末
 長日 なぐしとの思ふものから春の日もきのふくゝになる早さ哉
 山 どの山の山うごくべしどもさき物をあゆまひ長く裾を引らむ
 小流 せゝらぎのさいまにさへて行く水の波だたしお見ゆる幼なさ
 少女 里中に遊ぶをどめゝ結ばれの解くる帯だに見も知らずして

翁 何事も老らぬ翁のさとしこりたれもわはれといふ人此なき
 童 幼なげも早なくなまる童さへ背にかはるゝや樂しかるらむ
 老 何事も聞えひがめて老の身のことたしかなる思はくもなし
 老 老ぬれば松の葉さへもかのづから打すげきたる面顔にして
 貝 蛤のみかたやいつまきかねてこなす彼方につく世えけり
 鐘 いづちへどけふのもてゆく風ならむ野寺の鐘の一聲もせぬ
 灯 いくたびか心もどなくあるならむけまくやほしき夜半の灯
 川 こゝよりのまゝそなたへど方かへて流るゝ川の水の老ら波
 雨 けさ見れば夜のまに雨も降りはてゝおとなし顔に歸る白雲
 船 紀津川にあぢかはに入る船のはの行く方わかつ住よしの沖
 船 いくばくう今なきぬると人毎にとひさくけさの湊出のふね
 流 ゆさけさをみる心地よしゆく水の岩かどめぐる岸の松かか
 山 深みどり小高き山のいははより苦生つゝくにはのおもかか
 雲 白鳥のとば山松になびく雲ひと羽ばかりもすするにふくれて
 閑居夕庭 おれのみやけふのありつる事ならむ松の實一つおちし夕暮

洲 汐みては唯一重よるうは波に今かくれたるいそのはなれ洲
 渡 今迄に人をのせこし駒さへものりたる古賀の見たし舟かな
 甲 飾りつゝ見れば人めくよろひうあゝが魂もこもるばかりあ
 肯 ともるものうとらるゝ物う二つなき首と一つの我がぶとこれ
 娘 わけぬれど親の心のやまのうちお朝いせさまる家の少女子
 星 風吹けば空なる星もどもしびの動くが如くひかる夜半うあ
 山 心ありてむかふともなき眺めにぞわが見いでる遠の山寺
 舟 來て見れば峯さひらなる高野山のぼらぬ先の心地こそすれ
 淀 大船のはしるへさきを危くもかしてよこぎる海人の棚なし
 鏡 さび人のいかにのりてか淀船のどまのうへなる敷のまが笠
 畫 哀にもなげきにくもる鏡かなうれさきおのが影をかくして
 群 世中にわがも此なしの身なれども畫に寫してぞもさる海山
 水 親か子か妻にてもあらむ覆羽の虫とりかはす小田の田鶴村
 船 音 ぶけゆ々バ圃の枕のもとにきていはまをくゆる水の音かな
 船 路 帆上まバ舟の朝いひさくまにも陸路一日のほどい來にけり

歌 人 老ぬれどまゝ此春もさく花此ちる花此ともいひくらしけり
 暮春山家 春くれてながき日さびし山彦も獨ぢちだにけふのせよかし
 暮春草花 かつくも實になりゆきてゆく春の末ばかりにも残る菜花
 山路三月盡 かりさちてえも留まらぬ山道のとくも來にける春のはて哉
 三月盡前日 あな嬉しまぶわりけるを老ぬまば暮行く春のひが數へして
 首 夏 暮はてし春のなぶりの心から花めかしくも見ゆるかしの芽
 風後新樹 けさも猶靡きしまゝにふし柴の若枝の風にこりやまづらむ
 雨中池魚 雨降れば池のみな口さらべても喜びがほにうかぶうろくづ
 時鳥過 戸をわけし方にならで過つらむこゑのみきしはつ時鳥
 時鳥人傳 ひと聲此おぼつかなきも子規さぶかになして人のいふらむ
 螢 飛ぶ螢くらき木のまを出て來てなかく月にかすかなる哉
 夏 草 なでしこの花もまじれる夏草をおしまるめてもになふ里人
 江 笠 おほくらの入江さやかにとぶ笠そ此一むらに船をやらばや
 蓮 露 けさ見れば蓮のまる葉にゆれもあはではしつ方にも並ぶ白露
 新 竹 やゝ高く成もしながら若竹の子なるすがさぞ末にのあれる

竹の子 童こそいたくほりすれくま竹の子のこのどちの相思ふごと
 瞿 麥 いでまことというなる人の寫すにもゑぐくのぬる撫子此花
 卯 花 見がまめる里のの高き嶺もなしなつ見る雪の垣のうのはな
 旅 中 川 旅すれば軒の上も行く川のそこばかりなる宿もあそかれ
 夏 松 松さへも枝の下風どほしやりて腋すしらふさてるいそ哉
 わ らは は 幼きもまゝ幼きをあつかし鳥の子いざくさど此たわらは
 欲 ち は な れ て あ る も の を 又 惑 は す る あ ら 市 人
 棘 ち は な れ て あ る も の を 又 惑 は す る あ ら 市 人
 藤 ち は な れ て あ る も の を 又 惑 は す る あ ら 市 人
 暮 け さ の 三 つ き の ふ の 二 つ う き ぬ な は 寂 し き 池 の 心 葉 を か し
 雨 後 水 草 ち な ぎ は の 今 ひ ど き は も ま さ り こ べ 沈 め は つ べ き 川 骨 此 花
 湖 邊 夕 立 ち づ う と お か き く ら し ゆ く 雲 見 えて け さ 夕 立 此 花 が 此 山 越
 鳥 夏 川 の す さ き お む る 村 鳥 の が ゆ あ び の 瀬 あ て ち り け り
 蛙 清 き 川 に せ れ る 沼 あ の づ か ら 聲 な き わ けて 住 む か は づ 哉
 笋 ち ら ぬ ま お 生 い で て 門 お 竹 此 子 の そ お ち て 高 く な る 景 色 哉

夕	三	初	述	茶	山	老	團	朝	嶺	岸	行	夏	老	
月	日	秋	懷	郷	扇	立	菊	花	松	花	花	旅	旅	
暮ぬまもいと面白しねやの月はのゝにさせる影を見いでて	さながらありつる物を暫しせがめで失なへる三日月の影	けさまざき秋の初霧さちこめて大城の山の野おなりふけり	うき事の今ぞまほらをあぢきなく世離れたりと思ひつる哉	こぞながらをしを残りし木芽さへ壺の中ふてふりぬるがうさ	山里のすまひを見れば好ましき事もなきこそ好ましげなれ	折々おあふぐも夢のうちには哉身あくる風も知らぬうたゝね	あおおとういひさして末の忘らるゝ老こそ老の心ありけれ	夕立のはれて此のちのあだし日の心地おありて宿ぞ涼しき	明るよりかきくらしきて夏此日の此あさけより夕ざち此空	めをのごと見ゆるもあれば嶺此松一木離れてあるも在けり	岸遠くさせる夕日此かげうけてすいしく見ゆるあし此本立	咲つゝくう此花垣此もとすぎてにはばかあくらさ夕ぐれ此道	夏咲くいなつの景色おきく此花姿さへこそすいしかりけき	程ちかく限きぬべき老の身おゆくすゑわかぬ旅もこそすれ

荒	獨	野	浦	雲	庵	雨	見	荒	庵	庭	雲	門	雲	竹
家	見	月	月	月	月	中	月	屋	月	月	端	月	月	間
あるじぶあ心もつかぬ我庵のあれしいたまをえれる月かあ	つどひして物さむがしくめでましや一つの月の獨こそ見め	花の如つどお折られぬ月なれど歸る野べよりたぐひてぞくる	なごの沖のこなき見やりて行く月お一人向へる人のなき哉	村雲此おしくまれるそぎへあもある時のある秋の夜此月	夕されば取ちらしてしくしげども皆おしやりて入るゝ月影	月の今おがやのうへにきたるらむ雨ふる梢てりがほおして	我庵のくまなきそらお嬉しくもくべきさまにてむかふ月影	ふせ庵のねや此板戸此かおさうらで中々ありき夜すがらの月	おくもあき臥屋のうちとあさべてか入とみるまお出る月影	庭の面のあまり清さに見もいで老身を引入て見さる月かお	行末のくもふたがりて見えあがら方おがへてもゆるぬ月哉	門おこそむらひて來たれ峯の月明け放ちても在しえるしに	伏庵のまどぼりある雲間おもさもゆきあへる大ぞらの月	移し植て手を放つまも待わへせ夕月させるのき此なよたけ

山家歸路月 歸るさをおくりくるまお山里の月もみやこの月おなりゆく
 夜々見月 よひくお眺めし月ともろともお友のまどぬもかくる頃哉
 萩 露 花をまつ心わすれて見つる哉露つやげおかけるはぎの葉
 夕 露 秋の野の花おははれてねてしまおぬぎかく太刀の鞘此夕露
 さ り 野も山もけさ立おめて誰が里も見えぬ霧こそ見渡されけれ
 薄 窓の外おすゝるひて立つ花薄おき寒くなるまるしとぞ見る
 虫 根ざしゆくかさお生でて花薄まゝ一むらになりおけるかお
 促 織 まことおも機おる虫ぞ機かりめはてお添へる聲此をさ音
 蟋 蟀 まちかさお驚きたけけ細櫃此そこお來て啼くきりくす哉
 秋 風 大空お日にてりながらうき雲のかくす間さむき秋のやま風
 蜻 蛉 旅人の道ゆく笠此うへおさへおなづらはしくゐるあきつ哉
 秋 鳥 なつかしく菊いさゝきの聲すきり残れる花も見えぬ垣根お
 小流紅葉 ゆく川の水わづかななる水尾おさへ流まわきてもやる紅葉哉

山路秋興 もまぢ葉のちりうくなべお扇さへ流しそへても見つる山川
 秋 閑 窓 たけさかく匂ふさかりの秋萩の花くみおも窓の見ゆらむ
 蘆 火 隙もなくさうねばもえぬ蘆火哉身の暖さけくなる時もなく
 瓶 花 折ぬまいかくやありしと花瓶おさもれもむけてさせる秋萩
 三 栗 三此内のみなし栗こそ悲しけれかさなりおさおありおくれつゝ
 子 栗 ちりううぶ松のひと葉おれどろきて蚊おなる虫の沈む水底
 長 夜 長き夜おあきぬる時いねかへてそなたむくさへ珍しき哉
 初 冬 此どなる空おされど神無月春といふお短かしの日や
 山 時 雨 いかづちのそゝき峰の初時雨ちかくこぬまお雲消おけり
 田 家 時 雨 降いづる空をもえらおかど田までぬれおいでたる夕時雨哉
 海 時 雨 見わたせばかつまの沖のひろ此海此いく所おか時雨降らむ
 月 前 時 雨 照る月のなべて照せる冬の野をどころくおなす時雨かお
 夜 路 時 雨 さ夜時雨ふるどてひらくからかさお月もさしふる里此通路
 船 中 時 雨 むら時雨沖へを過てれるしあへぬ船のはきはあまづく白露
 鴨 面白く波おうかべるあし鴨おのれ舟なるこちとぞみる

そはづをやまごの時雨あひて我身さへそやづあなれる夕暮此道
 けさ見れば汀の鴨の身づからもおきならべたる友ねぶり哉
 暖さげもなげふなり行く時しもぞ離れがてある夜半此埋火
 つくくどたぶさ老る程を見てあさりうかななる埋火此上
 風わらく向ふ波路も友千鳥ともあはせたるちからあぞゆく
 いく度か影失なひしとぶ千鳥身を抜れうへる波のまぎれあ
 さつ波の立のさわぎあ友ちどり雲あさかくあぐる一むら
 うかびいでて時雨あぬるゝ鴉鳥の雨よぎがほお沈むある哉
 さ波立つ水田あたてるまなづる此れし羽も寒くあさる朝風
 たい一つのある灯火ながらも冬の夜ふけてかかぞさむけき
 木葉さへこゝあかくれて山風をよきとあるなる庵北かた陰
 一かさあむひひてちれる松の葉あ風の行へをえるを庭かあ
 神無月のどけえなりて雪のまかまぎらはしあもふらぬ朝霜
 冬寒え見る人さゆる頃しもあまさやけき月の幾夜つゝきぞ
 寒月漏間身をよきて見るぞ寒けき板まよりさえ通りさるねやの月影

冬山風海靡きなご此沖よりさえく〜てさもほそげなる風此吹らむ
 冬山家ははさたけなま〜し木もよくもえて都あかはる冬の山里
 冬雲何とかや月あひあらでれそろしき物も出べき冬の夜のくも
 雪限なくきのふもけふも積るかな春まで見るにこれやこの雪
 積りさる雪あゆきふるふゆの山もどの姿いはるあそひ見ゆ
 樹々積雪木毎あひつかりておれと降る雪の花も櫻あまされるいなし
 雪中行路ゆき深きた〜一筋をふみまけて大路もけさひせまきほそ道
 山家歳暮山中はなかく〜鬼やままさらむやらふおとなき年のくれ哉
 歳暮正月より月々あわりし月のはて年のはてあも成あけるうち
 春雪冴あへる空をうさてといひもあへず嬉しき雪も降る春へ哉
 隣鶯さばかりの我身さるさあかからうせてとなりノ聲あなれる鶯
 鶯梅が枝あひとく〜となきながら見ぬかほつくるあは此鶯
 夕鶯夕づく日うつろふまごあうつるかな梅あ木づさふ鶯此らあ

下巻

行路	鶯	梅	閑居	餘	濁	歸	鶯	梅	水	上	い	野	原	春
鶯	香	香	香	寒	醜	雁	雁	香	梅	梅	な	霞	霞	霞
ゆく人をどほく過して花のまふ又なきいつるうぐひすの聲	庵の戸を少しひらくを園生より去り顔み來る夜半の梅が香	どふ人をいとふ爲どもあうりけり梅の香おゆにさせる我門	時たま春とも見えず北山のゆきげの雲此日をおほひきて	み冬よりかきて飲さる酒さへも残る寒さのほごのわりけり	さぬるかど見れば程なく童への歸りいそぎのはるの雁おね	ちる花おたぐひゆかで梅が香此園此内外おまよひぬる哉	咲く梅の花すゝるひもふくからで身をさかさまにまがる鶯	水ちかくうちされて來て梅の花とさまかくさます小枝哉	雪消えてかつまの磯菜ふき上のまさごの下ふ又うもれけり	庭さよくはらひてけりと見るばかりはれさる空の朝霞かな	立かはる霞を見れば朝なくさきのふお同じ野のなかりけり	春霞ながらまゝおをちかたのあらゝ松原もどばかりして	かどをいでて月のありうを去らぬまもまづ朧夜の面白き哉	かたぶけバ月影さむくさゆるかな中空までや春のおぼろ夜

若	橋	春	折	風	栽	柳	待	歸	棟	土	燕	雪		
霞	水	梅	霞	柳	緑	雁	雁	質	筆	雀	雀	雀		
かりたちて誰つまさらむなの川の流あさゝも生るお此ころ	をちこちお霞さな引く野への橋渡るまじきも渡りてぞ見る	冬氷うちとけまぎて春かはのさしのちはらあわがるやま水	えもいはず心おほしき梅の枝おもひあてゝも人のをれかし	亂れたるけしきも見せで山風のゝて霞のいつよりうなき	折どりてさしゝ姿もうせなくあうちされがほなる柳かな	あさましく庵の軒端のあれされと靡きよりてもそふ柳かち	打垂るゝまざり柳の枝のえぶ土おつけるいなおのまおえぞ	雪折のくやしかりつる一枝よりちゝお生いつるあを柳の糸	今いゝ見じと思ひし春此雪降のふるとてまゝまされけり	もゝち鳥さへづる春の聲此うちおこりなく雁の別をぞする	年毎おな故もなく冬をへて春おあふちのみいのこりけり	行く人をぬなか童の見るばかりさち並びたるつくゝし哉	つばくらめ親まぢかねてならべれば我も遅しと見る軒端哉	雲お鳴くひばりの聲の絶おけり見いでぬ先お落やまぬらし

茶 樹 さどもなき頃より花のさく木哉ゆもつまでこそ生茂らせめ
 春色似畫 山とほくさてる霞のまへおけさかいそへさりと見ゆる松村
 春 鳥 わがさづき身おもまさりて春霞立野のはら此鳥のゆきかひ
 も千鳥さへづる聲のたえまおも獨ついでておくがら哉
 瀧 水 このまより流も出さる庭たづみ流れゆかではる雨りき
 夜中花開 水 わさどでお人驚かす爲あらむ夜おかくれても花のさなる
 春 月 我宿の花よりとこそ思ひしういで来るかさをかふる月かな
 待 花 ささつやと又もとひこば櫻花まぶとばかりいえこそいはれぬ
 ふゆめりと思ひし庭の櫻花ひらくを見ればわり葉なりけり
 櫻 の 宮 おまじまの櫻の宮の花さかり見る人さへもはなにぞとらま
 居おらびて見る花おれど面白き枝の蔭おのわが身ありけり
 見 花 皆人もたそがれおろの夕まぐささくらのもとを櫻と見れ
 夕 花 歸り來て寝ての此ちさへ花見つゆられて舟おある心地哉
 船 中 年をへて中もさかへぬ櫻花をまからをれておればこそあれ
 花 下 うさめのと見てこそまぐれ一盛ありなば櫻ちるいなおぞい

里 夢 中 花 花 花
 櫻花さきなみざりそ今の世いやつるゝあこそ人もあなづれ
 我やどる竹の下道とちをれてむかへば花のおほむらのさど
 さめぬれど夢お見えつる花此枝とらへながらにある心地哉
 折さめて一つおもさる花の枝引おかつ手おちるぞわびしき
 おはれさの程のまらざつて大かさの花さき宿もなき世えたり
 このもとおゆきかはしめて櫻花おのがつかへお主をぞする
 よそはしくりややかすどもなき花の人お物はぢする様もあし
 待かねてはらざたしくもなる人をさきてゑまする花櫻かき
 まことおの指をもさしじさくら花今夜此夢お一枝をらせよ
 宿おしてめでし心の見ゆつりおいつこ此花もおのがどを見る
 まとおする人のなかおも打たれてさきまじりさる糸櫻かき
 いと櫻いとうちさるゝさま見れば柳が枝おさかせさるかき
 雨ふればかはす枝をうつりきてさくら此ゆも青柳のつゆ
 花 下 いそぎおし花のもとおて悔しきいさこえおどしの里此友人
 月 下 折とりし花を踏しとやこのまよりもたる一枝をてらす月影

深山花 花 むくつけきものさへ住める奥山おなほ此心もなくさくら哉
 花枝 枝 たが手おて見るおも同じ花かれど先どらまくのはしき枝哉
 夢山花 花 わか老して歸りし故う思ひねのゆめちあついく花此山まぢ
 思花 花 手折つる跡をぐるしき花此枝なりあふまでいかみ久しき
 病床見花 花 折どまばをりし枝口くちいりて心よこくもさくさくらか
 戸花 花 いねかへて見るこさふも櫻花同じものから珍らしかなる
 野遊 花 昨日より垣根此花の開けどのくま戸もいさくまやびぬる哉
 春日人來 遊 昔よりさもあくがるくせつきてかへるさなしの春の野遊
 旅中花 花 櫻さく春此みじか夜明さてばおどなひえるき人を來ませる
 月前花 花 あままでのいあらじと思ふ花をのぞ見てゆく旅お成おける哉
 花前待月 下 出はてし月もならびぬ櫻花くらべ見よともいはぬばかりふ
 春夕花 花 かさ山の花の下うか家をなまあらばと人おなげかしめつゝ
 乞花 花 およひさく花を見出ていかさまおそき月をも待つ心うか
 花を折る人のとふこそ佗しけれあるをもさしといふと思ひて

春夢 花 たどへさく折らまほしさを櫻花見る夢おてもいひやまつらむ
 落花 花 いからしき山かせさてば櫻花香ばうりおもおそれてぞ散る
 落花 花 風ふらばやすくも塵ふこさませて花もうつまく庭の面かな
 落花 花 はしななき草此まるやの櫻花おかげも聞もわきなくぞちる
 落花 花 かねてよりふさふさこめてもあり顔お開く扇お花のちるらむ
 夢中落花 花 ちるといへばなべて碎くる櫻花はふらうしたる心おぞ似る
 門落花 花 夢おてのちりし軒端の櫻ばなさむるまふく又咲きおけり
 落花 花 ものこひの手おさへ門此櫻花あふふるばかりちる朝けか
 落花 花 さかりかと思ひしほどお庭櫻ちるけしき立つちの花びら
 落花 花 何ゆゑお風此神おのあまされてちらさでおかぬ櫻なるらむ
 雨中落花 花 ちりくるをむかへて立るわれよりもうは此空ゆく花此山風
 隣落花 花 ふるとぶに見えぬ小雨も咲く花のもろき心おこさへてぞちる
 隣落花 花 ありはてしなしと聞けど垣越お思へば花のありかある哉
 風後落花 花 風たえて梢をまればさくら花われからちる二つ三つ此
 風落花 花 風ふらばまじろくまおも吾前おこし方わかぬ花のちるらむ

水上落花

むすびわゆる山下水のあはさえて去つまるまゝみ浮ぶ花哉

群鳥

さまぐの鳥面白きゆふ花ふまゝくはゝぬひわの一むら

庭落花

くちもせで久しく庭ある花をあふしか枝あふかぬ山かせ

春池

ちりぬれば一花残を影もなくあまらみ水のありのまゝなる

故郷落花

さかりあも人こざりつるさま見えて庭草さかし花の故さと

春日

何事もなすわざなくて長き日み日此あまかをば幾度う見し

暮春

おそしどの思へど早きものあらむ西にいされる春此日の影

暮春人來

春ふかくなりぬる宿の百千鳥うちはぶけどもちる花もなし

海上眺望

くればつる春の夕べの寂しさに歸らばどはぬ人やまさらむ

燕大根

手ふだあもすゑて見るべき妹が鳥遊かお細く幼なげあして

鯉

春深まおはねかぶらも諸共お花のふぐひあなれるころかあ

筏

ちとせ川さしの柳の影まめてたがすなどれる子おもりの鯉

初

くれて行く春をもまらずやり顔あせいの筏の水尾くぶし哉

葵

いばらさへ花の盛いやはらびて折る手さばりもなき姿あか

軒

鬼の子の鬼なりけりな今年生の葵もいばらありと見ゆるの

山梨

くさぐくれまぐひし露もあさち原まおと今夜のどぶ蓋かな

扇

川風あむかふはさるの行かぬてたゞよふ軒の松のまゝかけ

竹

ま山よりうつし植ふし山梨のましろき花をなつのすしき

村

わらはへの紙あつゝめる蓋さへ夕べあなればどもしぬる哉

待時

夏さちてひらく扇の蓋をまれば立のありさる春がすまかき

郭公

竹の根の其ま短かき夏此夜いふしつゝけあや蓋もねてまし

夕

うどめほる谷の底なる少女どもまれあは峰此行かひも見ま

五月

かくれます佛の御影をがみてのその世の人どなくこゝろ哉

早

いつもくゝよひよりなくを子規心得がさき夜ふかさぞかし

雨

あなはかおれのがくせあて時鳥まゝ一聲のこまひありけり

五月

てるる日も涼しき磯の水をあささ底も影のよするさゝ波

五月

どりはてしき苗を見れば水の面此月の上も植てけるかあ

五月

五月雨の晴まを乞て一つぶみ星のかげこそあふさもどむれ

里五月雨 ささづれの渡りかれさる橋はにてちうきもどほき川島の里
 蟬が枝あすがるやがても鳴く蟬の其かやまさの我ぞともしき
 虹 晴残るさゝ一むらの雲あのみわづかみのこるなつの夕あじ
 夏雨 後 はれぬれど梢あふゝむ夜半の雨あてる日涼しく見ゆる杉村
 夕立 降るふらぬ定めかねさる景色しておのれなづめる夕立の雲
 庭草あ水そゝささる夕まぐれ涼しといふのきよきなりけり
 五月雨將晴 ささづれの時過ぬらしおのつから夕立めきて降もつゝかず
 水 雞 里人の小田此くひなも聞馴れて聲のうちあもうた歌ふあり
 打さるゝ柳のいとあすがりてもひかれじとする浪の乱き藻
 瓜 かくばかり實あしなりての市あてもうりをしげなる物あやのあらぬ
 蓮花 夕ぐれの風を涼しとねぶるまはすの一花ちりつくしけり
 蓮葉 濁りあのをまぬも此から蓮葉の世此ちりあつゝ糸の在けり
 虹 あさくら此夕山にてよそのせあうつろふ虹の影を見る哉
 紫陽花 かつくも園生あさてる竹此皮あのをえらさるる紫陽花此花
 移りゆく日敷を見せてかゝへよりあく薄くなる紫陽花此花

蜻蛉 かげろふの羽つくるひも涼しきあちがやが末をすぐる秋風
 初秋 秋立てもず鳴く野べのまづけさあ萩の盛のいつうとぞ思ふ
 萩落花 枝毎あかゝげて見れば萩の花こられし程のかくしぬるかあ
 すゝさ こそし秋をうさかひがはあ花薄はあいでさして幾日へぬらむ
 うらやまなくむかひかへさる薄原昨日のそあさけふの此方あ
 秋の野をよそより見ればちぐさかひ唯一色の尾花ありけり
 はあいでし尾花が中にをしなく駒引いるゝいちのさど人
 長閑なる日にふくさめる萩のはもまをれて寒くふる時雨哉
 わりて見る度あ面白しいつゝも並べるさまの同じさや豆
 草花 都人見しこともあらじをどめらぐ箕に折りさむる秋草の花
 女郎花 秋草のをのこめけるもなき物をひとり名にあふ女郎花かな
 女郎花 女郎花この一むらの夕ばえのあさひのまらじ芝のさどびど
 水邊 葛 川さしに浮べすてさる船あだあつなでづさひあきぬる葛花
 なでしこ 放つ矢のゆくへさづぬる草むらに見いでて折れる撫子此花
 芋 はさぎの塵の下なる芋すらも子の親あこそつきて在けれ

朝	出	月夜歸路	雲中	月	水	梨	蓼	蓑	塵	麻	貝
顔	月	月	月	月	月	子	子	虫			

夕まぐれ今も咲くべき景色してけふの暮れぬる朝がほの花
 かのかからほはかなく咲きておく露に涙ぐましく見ゆる朝顔
 折とればあらぬかさむく朝顔も扇ふぶどうけて見るか
 今までの待ちどまされて山の端をいではなるゝの惜き月哉
 月影をいざしはなちて山の端にまどきもどれる夕ぐれの雲
 山べより歸るわが身を送り来てわくれバ門を月もいりけり
 雨ぐもに覆とられし夜半ながら月をこゝろに抱きてぞぬる
 山の端をいではなれぬく月見れば望おもあらぬ影ぞ寂しき
 浮べつゝもくどいなしお月の上を只過おのゝすすむかは水
 絶て世になくおあしおてわらましを侘しき儘にありのみぞうき
 時くれバもろくぞ落る山芋のみいたが身にも變らざりけり
 みの虫の軒に梢に見えながらなくといふ事を聞しばかりぞ
 あまりにもさし入る閨の日影哉たゞよふ塵もあらはなる迄
 今いどて打ぬる時の命さへわが身とともに伸ぶかと思ふ
 手にとりて空しと捨るうつせ貝とあ世中のかくこそ在けれ

衣	鳥	水邊紅葉	積雪	荊	機	鈴	月	月	弦	海	雲	杉	名	鹿
		草	田	織	虫	鐘	前	鐘	月	月	中	所	所	月

あはせてのまゝとき放つ古衣かくてぞ春もあきも經にける
 かのが身おまがふばかりもあまる子を猶はぐくめる親鳥哉
 山川のわなゝの岸の初もとちはしなければやけふも残れる
 まとい行く方もねさすつば草のさえてのもどを忘さやせぬ
 みわさせば秋のちまち田かりはてゝ我庵一つ残しぬるか
 はさかりめはさもの細き音すなりいかお狭きかのが細布
 淺茅原ひとつおされる虫の音おふりはなれても鈴虫のなく
 夕まぐれ暮るゝを告るかねの音とともお月出る野への古寺
 よく見ればわれおめやすくましくて遠くもあらぬ空此月影
 夜々をへてかけし程さへ半なるそらおわけゆく有わけの月
 我宿のものありつるをどいめえでほくやりつる海原の月
 薄雲おねぶりがほなる空の月はるゝの夢のさむるなりけり
 一本の杉のこずゑもかのづから月をま山のけしきおどさつ
 いさよひて高くもならぬ宵のまやわが物と見る月隈のさど
 ねつゝさお過行く鹿の數みゆるあなさおもての月や出らむ

鯉	雨	鶴	秋	灯	出	水	雲	葛	そ	窓	雁	山	裕
夜	鐘	水	水	月	月	月	月	月	月	月	中	家	衣
鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	鐘	群	鹿
夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	夜	鹿	鹿

ちざりあれバ尾花が中を宿おしてはかなき袖のふり裕かな
 都人どひきてあらバ見せましを川うまわさるまかの一むれ
 打むれて騒ぎたてども小田の雁ゆく方見まバつらも亂れず
 かきくらし雨のふれども嶺の月こゝろのうちお出るころ哉
 わかゝらぬかさもなかりし窓の戸の只かさそばお残る月影
 田を遠ま笠の下おもよく見えで誰おう似さるそやつあるらむ
 行く方おかのがたつきのあければやそらお抱きてまどふ葛花
 雲もなきそらも一むき見えぬるを道をかへてもゆかぬ月哉
 まとかあて時のま見せよ終夜ながれまざる、河のせのつき
 永き夜の明るおまぼしき立てこの月いつる横ぐものそら
 秋の夜いまくらべちかき灯のどほくあるぶふうとましき哉
 小田の畦の只ひとくはおおとし水音もなきまでなれる夕暮
 村雨のはるゝ空よりとくもきていまぶかわかぬ庭ゝさ哉
 さ夜時雨とほざかりゆく音かへてちかづくをちの曉のかね
 おもしろくふる村雨やうれしけんかしらいでも浮ぶ鯉

山	松	貝	仇	羽	栗	塘	山	山	崎	星	川	谷	燕
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山

獨すむをしかと見れば汀なるあしの葉うかお妻もありけり
 ひどりして行くおもせまき山のまお水さへそひて下る細道
 さしやめて流るゝ水おまかまればどもへもなく下る川船
 数えらずさやかお見えて大空の星ばかりこそ闇なかりけれ
 たゝら嶋こぎ出て見れば唯一つさびしく見ゆる崎守のいは
 まち渡る月より外おあおおどぞおのれもそひて出るまら雲
 いはほさへめぐりめぐれる山里のかけひのまゝにゆく心哉
 見渡せば川にそひたるつゝみさへあがるゝ水の姿なるおあ
 なれかねてつな引あがく猫の子も手玉にとれる庭のち栗
 白雲にはねうちつけて飛ぶ鶴のつばさも今の塵ではらへる
 いきたるをころさじといはは仇をなす虎狼も市お出ぬべし
 いづくおか我身さぬると思ふらむいちおまるるなごの蛤
 人かよふ道のなごてい並松のあらぶすがたも行がほおして
 山松のいさわく音此あちきなき千歳もちいにきり碎くやど
 山島のかさはら高きそまにさへまゝ平おてすめるひとつや

千 歳 見てこそ思ひ出らるれ昔へもほのおぼえつるかやの山里
 海 日 夕日影なかばも海に入る時ぞうねくひかる沖のさいなみ
 潮 日 あはれも潮みちくたへら川堤にたなじたかさなる哉
 橋 上人 ふもどだにさはるとなしにたは安く人行ちがふをちの川橋
 嬰 子 いくばく此おどりまさりも見えぬ子のおへるたはるゝ哀なる哉
 時 雨 うらくくと空長閑なる神無月かゝる日おこそ時雨ふるなれ
 聞 時 雨 思ふどち語らひやめてさ夜中の時雨おのみも音せさせけり
 月 前 時 雨 もる月お庵のくるゝ戸わけ見れば時雨の雨のふる夜之けり
 山 彦 きたへする壁面白と山彦をかざりもなしによぶわらはうき
 落 葉 庭お落るこのはの葉おどたかき枕べおやどきしさよ中
 時 雨 幾里もふりぬらし来てさばかりや残り少なき時雨あるらむ
 炭 雨 そこのおのこ残るくゞけの音おさへふくる夜さむきみ苞哉
 鳴 鴉 村時雨まぎゆく跡のたひ風おきこえてさむし鴉のひとこる
 波のうへおみをなぐばかりうち入てやがて酔うふうくかた哉

千 紅 千 鳥 くら千鳥つばさ細めて向へどもそたへやらぬ此こ此浦風
 紅 鶴 睦ましき心もそらおあらはして同じ時こそうきはぶきゆけ
 干 菜 はこの菜の冬の引おし家毎お軒おかけたる古賀のやまざと
 有 酒 かつくもあらはれ出て沖の石比敷おもまると引く潮かき
 雪 酒 なき時おなくて幾日お過まらむある日お酒のあるお過つゝ
 寒 月 見ぐるしき庭さへ清くふりつもる雪のみ塵の世此外ぞかし
 寒 月 人影もなくて寒けき大路うきゆくかさとほく月にてらせど
 狐 松 とさしつゝ出て見ねばやあやにくおこもれる宿を照す月影
 鐘 松 冬さちて風寒からしなごのいそのあしなかななる滋の松原
 車 ともすれば犬おねはるゝ野狐の願みるまもなき世去らずて
 轉 居 いつとなき手枕のまお日お暮てねよどの鐘お寂覺をぞする
 四 十 空車むなもといさき背々のおもひめぐらしなお此さめども
 世 一 居 われからのおどなしびおも世をさけて年月ながくなる心哉
 歎 世 よそぢとてたどるかれしを夢此まお又一歳も加はりおけり
 我身こそ何とも思はぬめこどものおうじてふおへお憂さ此世哉

友 來 世 思 旅 船 綱
 いつよりかおもて皺びて老のどちいづれも同じ友垣ぞかし
 玄な高き事もねがはせ又の世のまゝ我身ふぞ成てきなまし
 旅にありていく春秋か過つらむ月のあるこそ家をいでしか
 路 おしかたお冬の日數の過はてしこゝより春の船路ありけり
 春をまつ人おや見せむなぶの浦の雪の中なるはなさくら鯛

は し ろ 世中此はしゝものある吾身おそ花おま近きま此おふのをれ

ふの四百九十頁花枝の次よあるべきをおさしつるなり

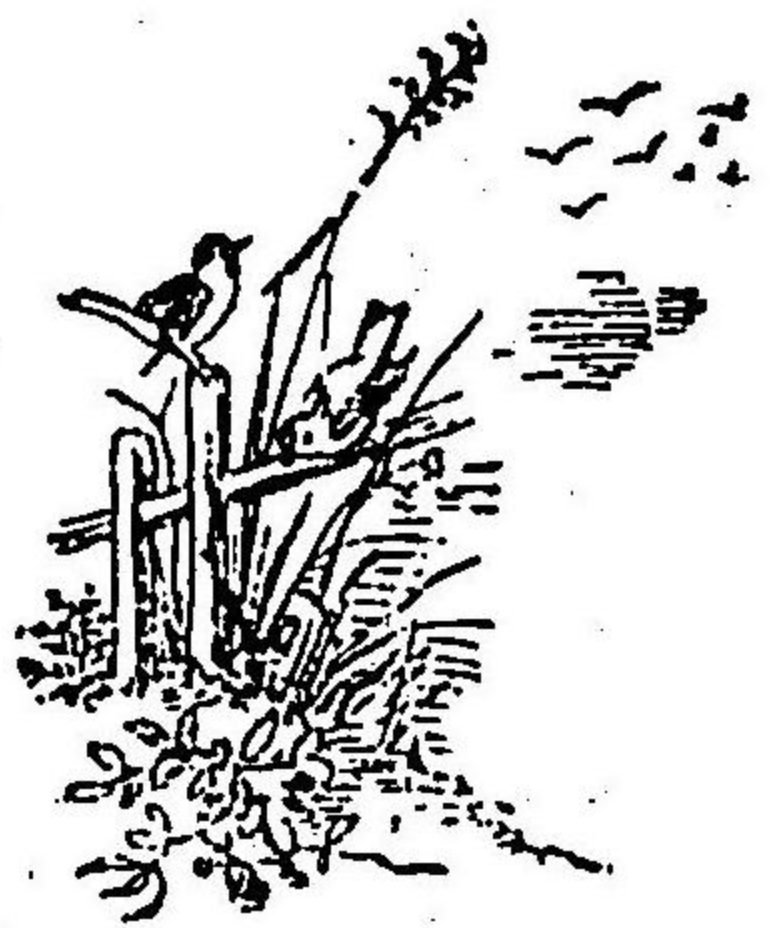
水 底 月 たゞ一葉ちりてうかめる桐此葉此かげいでかぬる水底此月

ふの四百九十八頁山家群鹿の次よあるべきを脱しつるなり

師の年頃よみかかれさる歌どもあなるをそが中より百首ばかり撰び出し
 て賜はりたるおこなさかなさより乞はれ其かさはらを摸して遣はしつる
 およくこと心の心をえさるいみじき歌どもなりと人々めでけるによりあさ
 び板おゑりて師に題をおひけるお見かろしよりの歌どもなればとて草
 徑集と名づけられけるなり又二篇も程おく物すべくなむ

文久三年亥初春

茂 村 恒 久



草徑集終



明治三十三年一月廿三日印刷
明治三十二年一月廿七日發行

定價金三拾五錢

版權所有

編纂者 佐々木信綱

發行者 大橋新太郎

印刷者 熊田宜遜

印刷所 熊田活版所

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

東京市神田區錦町三丁目廿五番地

佐々木信 網君編纂 續日本歌學全書

毎月一回 全部拾二冊
紙一冊五拾五頁以上
定價九拾錢
郵税一冊八錢
郵税一冊八錢
今亦江戸時代歌道中興以後の家集歌

既に萬葉以下の古集を校して歌學全書十二編を發行し頗る新道に貢獻する所あり今亦江戸時代歌道中興以後の家集歌論等を編録して以て完璧となすものなり

本 書 目 次

- 第一編 賀茂眞淵翁全集 上巻
目次 自撰晚花集○自撰淡吟集○春葉集○賀茂翁家集○歌意考○にひまひ○十二番歌合○國歌八論○同評○同斥非○同餘言○同餘言拾遺
- 第二編 賀茂眞淵翁全集 下巻
目次 さき草○うげらか花○答眞幸書○答勝義書○夢後集○贈大平書○答春海書○再贈大平書○魚彦家集○靜屋歌集○山のさち○筑波子家集○縣居門人録○賀茂翁家集正誤
- 第三編 本居宣長翁全集
目次 自撰歌○石上私淑言○後給屋集○稻葉集○歌のしるへ○詩歌論○歌歌大概論○海士の朝
- 第四編 香川景樹翁全集 上巻
目次 桂園一枝○同拾遺○新學異見○古今正義總論○桂園遺文○中宗日記○またね青葉○六十四番歌結○うす水○大いさ○歌學提要
- 第五編 香川景樹翁全集 下巻
- 第六編 小澤蘆庵翁全集
目次 隨所師説○かるかや集○歌恒集○須磨日記○古今正義總論補註○古今正義總論補註論○古今正義總論補註論○古今正義總論補註論
- 第七編 近世名家家集 上巻
目次 六帖詠草○同拾遺○蘆庵ひび○或問○振分集○ついで草子○閑田百首○垂雲和歌集○夢宅和歌集○杉のしづ枝
- 第八編 近世名家家集 下巻
目次 三草集○常侍集○あつま歌○柿園詠草○同拾遺○亮々遺稿
- 第九編 近世名家家集
目次 常山詠草○季吟子歌集○岡屋家集○古道家集○春柳家集○魚彦雜集○泊酒會集○松屋家集○五葉園家集○柳園詠草○五十柳振葉集○佐喜草○深園家集○菅清水○櫻園歌集○草徑集
- 第十編 近世名家家集
目次 桂園門下家集
- 第十一編 明治名家家集 上巻
目次 明治名家家集
- 第十二編 明治名家家集 下巻

佐々木信 網選

やまといしき

全一冊

上下三千載、未だ明治の大御世ばかり歌學の盛なるいあらじ。思へば萬葉より以下、勅撰に私撰ふ幾多の歌集ありて、優む其時代の風調をうかひふに足るも、かばかり盛なる今の世に、未だ明治の思想を窺ふにたるべき歌集なき、いと歎かはしき限なり。本所こゝに見る所あり。全國篤志の吟詠を募集し、本書を發兌し、明治の歌集として永く後世に傳へむとす。選者の歌界に於ける聲望の、世既ふ定評あるところ。其選たるや、嶄新に溺れず陳套に陥らず、流派の弊をさけて、最も公平に選ばれたるなれば、世の文學に篤く、和歌に志深き人、速に此書を座右お供へられむことを冀ふおなむ。(定價金三拾錢郵税金四錢○爲替ハ室町郵便取扱所宛)

發兌元 東京日本橋區本石町 心の華發行所
發賣元 東京神田區表神保町 東京遊京堂
東京麻布區筆筒町 文東堂

竹 柏 園 編 纂 書 目

日本歌學全書 十二卷 歌の葉 一卷

續日本歌學全書 十二卷 日本文範 二卷

歌詞遠鏡 四卷 標註枕艸子 五卷

千船集 六卷 校註明倫歌集 一卷

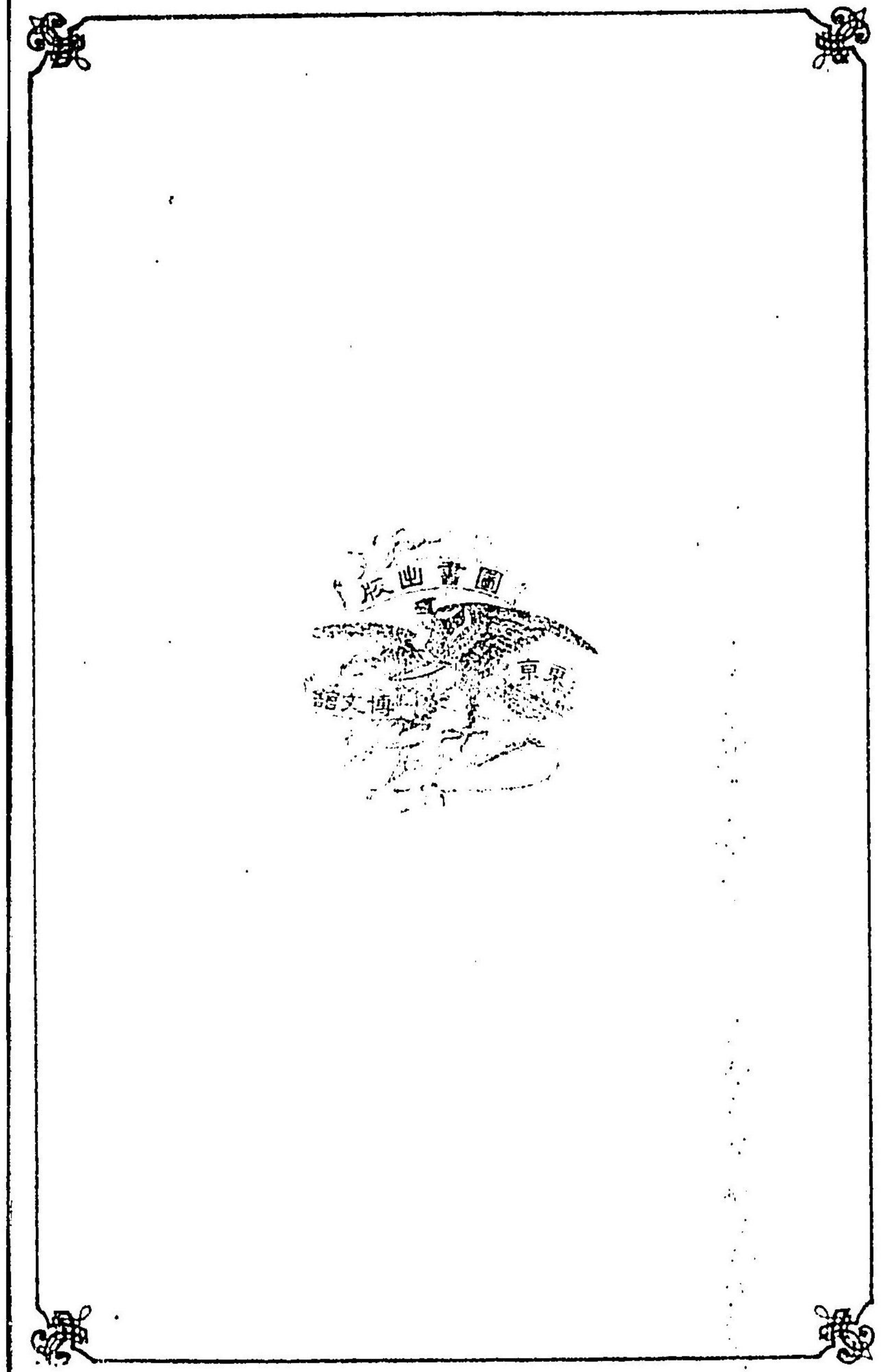
千代田集 三卷 足代翁家集 一卷

寶田集 二卷 增補詠歌自在 一卷

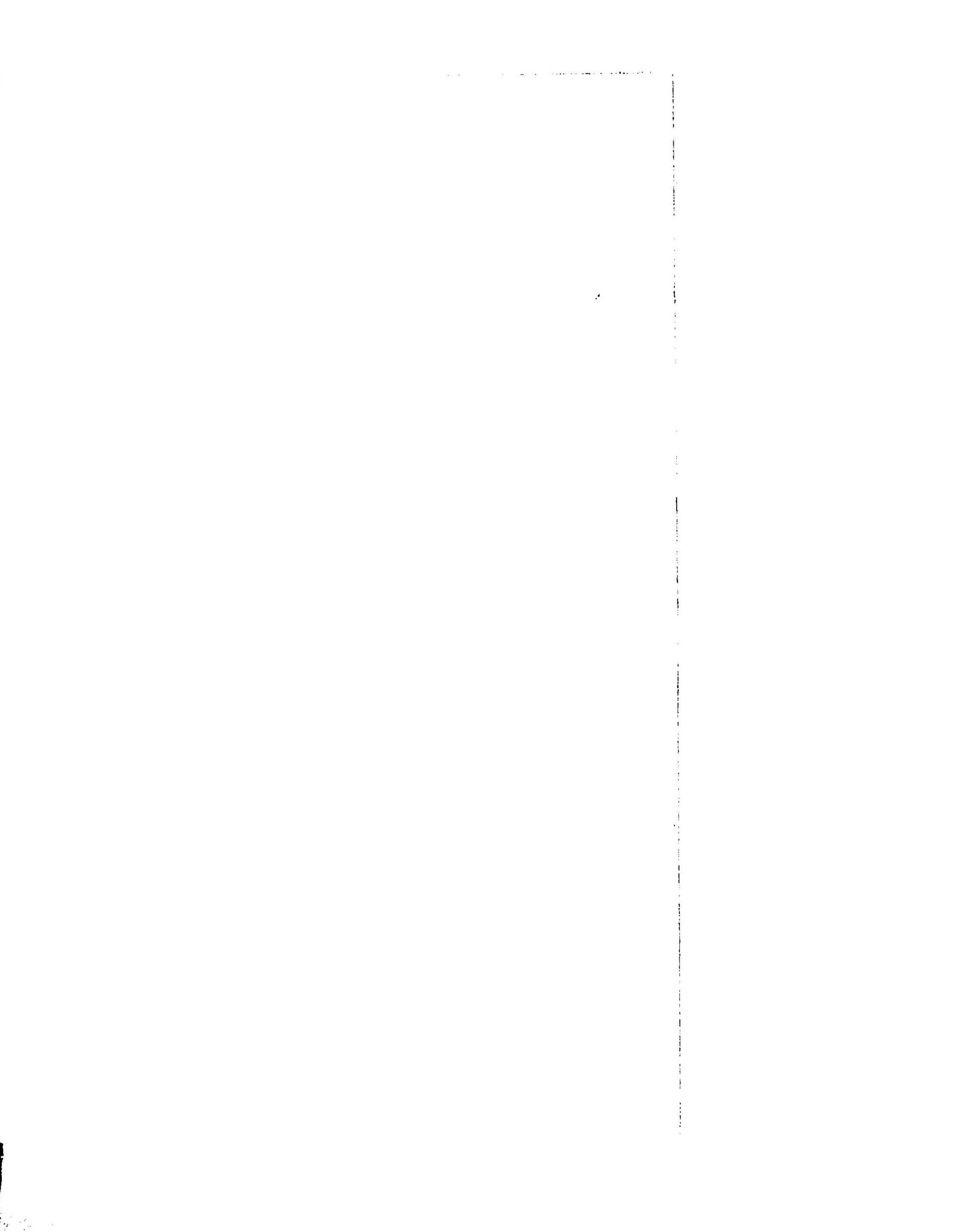
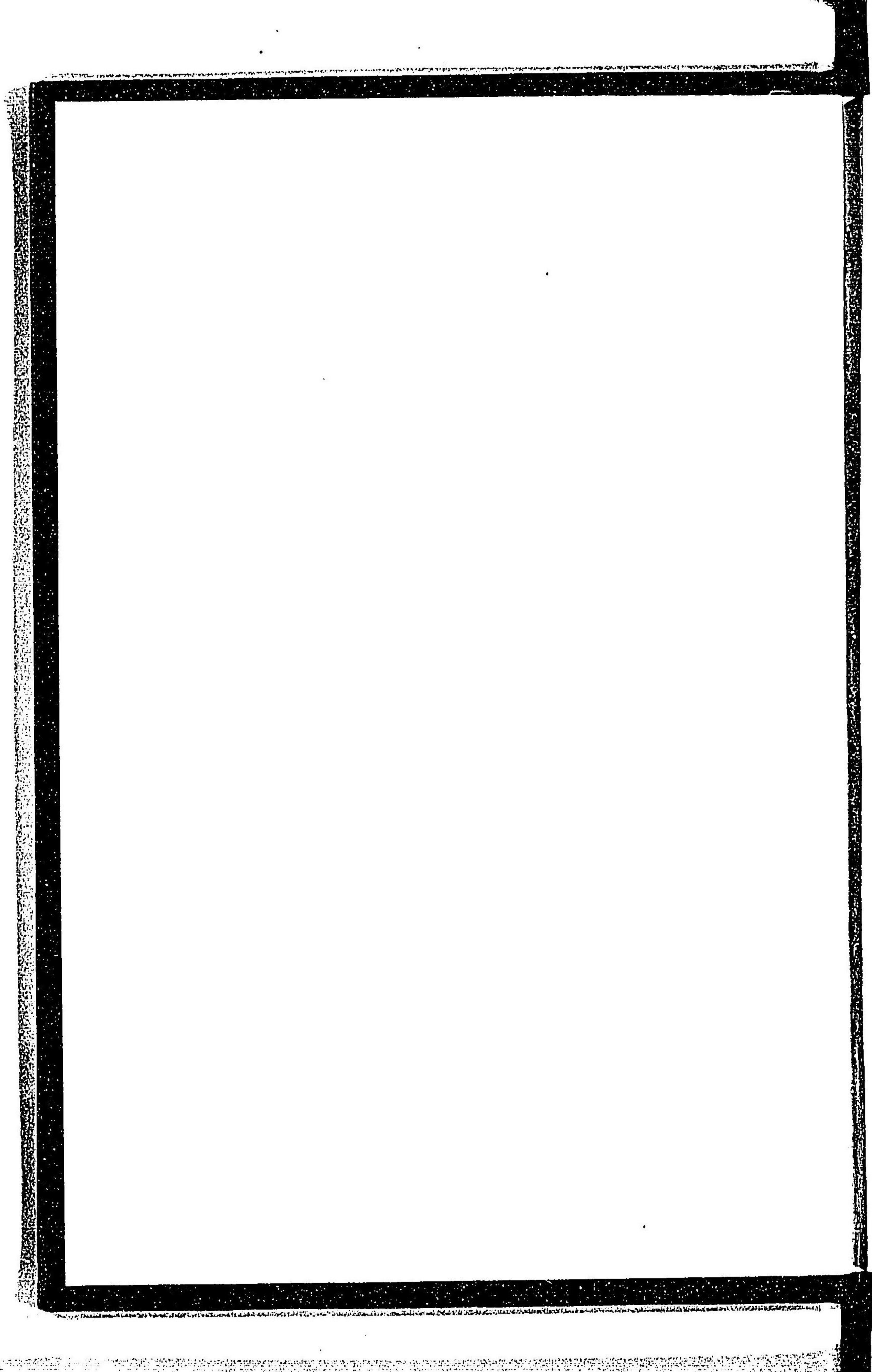
詠歌辭典 一卷 わすれ草 一卷

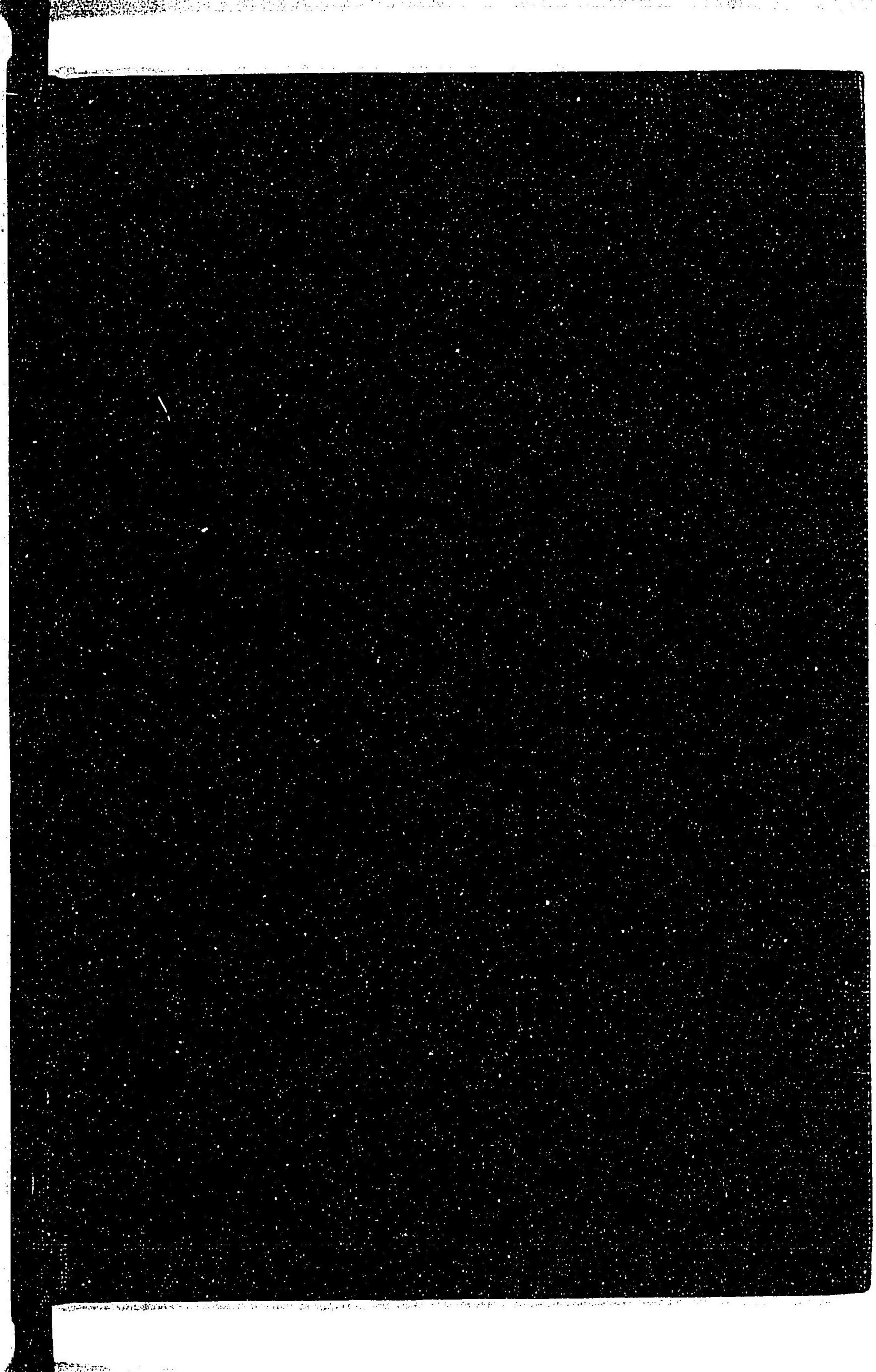
假字格枕詞辭典 一卷 落葉集 一卷

21 B 84









911.108

N6852

S2

